



KONICA MINOLTA

コニカミノルタ株式会社

環境報告書2016



Giving Shape to Ideas

経営理念  
新しい価値の創造

お客さまへの約束  
Giving Shape to Ideas

目次

コニカミノルタグループ概要 .....2

環境マネジメント

エコビジョン2050 .....4  
環境方針 .....6  
マネジメントシステム .....8  
中期環境計画 .....10  
2015年度目標・実績 .....15  
社会からの評価・表彰 .....17

グリーンプロダクツ(製品への取り組み)

グリーンプロダクツ認定制度 .....19  
製品の省エネ・温暖化防止 .....21  
製品の省資源・リサイクル .....26  
製品の化学物質管理 .....30  
製品での生物多様性への対応 .....31  
製品環境情報の提供 .....32

グリーンファクトリー(調達・生産での取り組み)

グリーンファクトリー認定制度 .....36  
生産活動での省エネ・温暖化防止 .....39  
生産活動での省資源・リサイクル .....42  
生産活動での化学物質リスク低減 .....43  
生産活動での生物多様性への対応 .....48  
調達活動における環境負荷低減 .....50

グリーンマーケティング

お客様が抱える環境課題解決の支援 .....53  
お客様の環境課題を解決するサービスの提供 .....55  
販売活動での環境負荷低減 .....59  
物流でのCO<sub>2</sub>削減 .....61  
包装材料の使用量削減 .....63  
製品リサイクルの取り組み .....64

環境コミュニケーション

地域・社会とのコミュニケーション .....66

環境データ .....69

第三者保証 .....93

編集方針

コニカミノルタは環境への取り組みについて、「コニカミノルタCSRレポート2016」で主要な取り組みを報告するとともに、より詳しい情報をウェブサイト上で開示しています。「コニカミノルタ環境報告書2016」は、基本的な考え方および2015年度の活動を中心とした掲載内容を、PDF形式でまとめたものです。

報告対象範囲

コニカミノルタ株式会社および連結対象の関係会社。報告対象が限定されている報告については、個別に対象範囲を記載しています。

※ 本レポートにおける「コニカミノルタ」は、コニカミノルタグループを、「コニカミノルタ(株)」はコニカミノルタ株式会社単体を意味しています。

報告対象期間

原則として2015年4月1日より2016年3月31日までの活動を報告していますが、対象期間以前からの取り組みや、直近の活動報告も一部含んでいます。

発行時期

2016年9月(次回:2017年8月予定、前回:2015年8月)

参考にしたガイドライン

主に、グローバル・レポーティング・イニシアティブ(GRI)の「サステナビリティ・レポーティング・ガイドライン第4版」、環境省「環境報告ガイドライン2012年版」を参考としています。

注意事項

本レポートには、過去と現在の事実以外に、当社の現在の計画および将来予想に関する記述が含まれています。こうした記述は、現在入手可能な情報に基づき、当社が現時点で合理的であると判断したものです。今後の事業環境により、実際の結果が異なる可能性があることを、あらかじめご承知おきください。

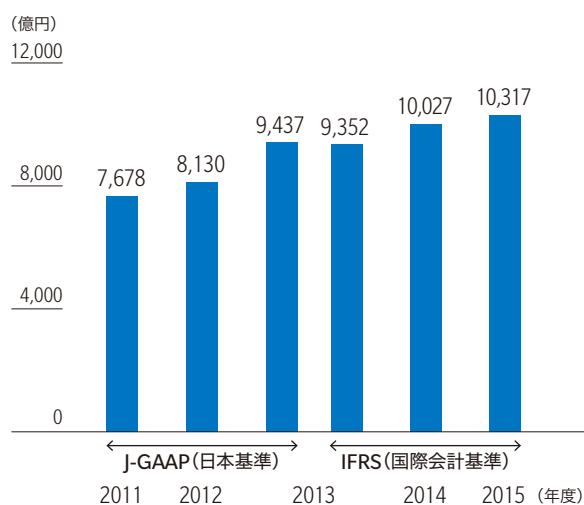
# コニカミノルタグループ概要

## 会社概要

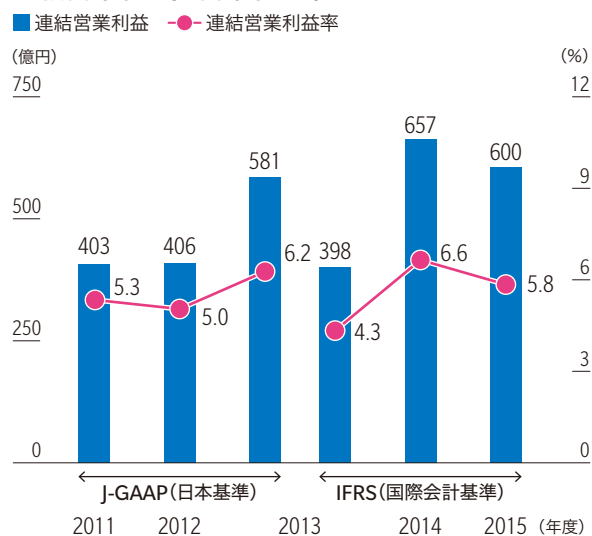
**名称** コニカミノルタ株式会社  
**本社所在地** 東京都千代田区丸の内2-7-2  
**代表者** 代表執行役社長 山名昌衛  
**設立** 1936年12月22日

**資本金** 37,519百万円(2016年3月31日現在)  
**決算期** 3月31日  
**従業員数** 単体: 6,198名(2016年3月31日現在)  
 連結: 43,332名(2016年3月31日現在)

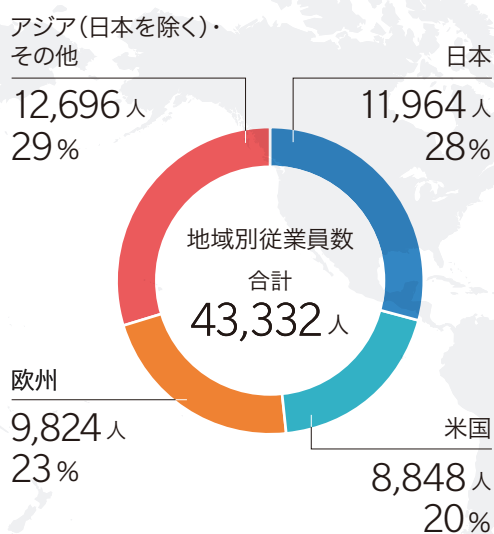
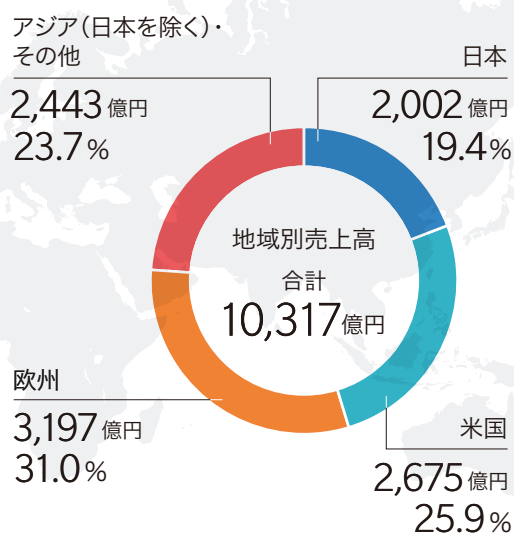
## 連結売上高



## 連結営業利益/営業利益率



## グローバル事業体制



# コニカミノルタグループ概要

## 事業ドメイン

事業	分野	主要製品・サービス
<b>情報機器</b> 	<b>オフィスサービス</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 複合機 (MFP)</li> <li>● レーザープリンター</li> <li>● ファクシミリ</li> <li>● ソフトウェア・周辺機器</li> <li>● クラウドサービス</li> <li>● Optimized Print Services (OPS)</li> <li>● Managed Content Services (MCS)</li> </ul> 
	<b>商業・産業印刷</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● デジタルカラー印刷システム</li> <li>● デジタルモノクロ印刷システム</li> <li>● デジタル色校正システム</li> <li>● プリプレス生産システム</li> <li>● インクジェットヘッド</li> <li>● インクジェットインク</li> <li>● インクジェットテキスタイルプリンター</li> <li>● 枚葉インクジェット印刷機</li> <li>● Marketing Print Management (MPM) サービス</li> <li>● Marketing Management Services (MMS)</li> <li>● デジタルマーケティング</li> </ul> 
<b>産業用材料・機器</b> 	<b>機能材料</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 液晶偏光板用TACフィルム</li> <li>● 視野角拡大用VA-TACフィルム</li> <li>● ガラス乾板</li> <li>● バリアフィルム</li> <li>● フィルムミラー</li> <li>● 機能性ウィンドウフィルム</li> <li>● 有機EL照明</li> </ul>  
	<b>産業用光学システム</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● レンズユニット</li> <li>● 光ディスク用ピックアップレンズ</li> <li>● 測色計</li> <li>● 照度計</li> <li>● 輝度計</li> <li>● 分光器</li> <li>● デジタルマニュファクチャリング</li> </ul>  
<b>ヘルスケア</b> 	<b>ヘルスケア</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● デジタルX線画像診断システム (CR・DR)</li> <li>● デジタルマンモグラフィ</li> <li>● 超音波画像診断装置</li> <li>● 医療用画像ファイリングシステム</li> <li>● 医療用画像オールインワンシステム</li> <li>● パルスオキシメーター</li> <li>● 黄疸計</li> <li>● 診断用医薬品</li> <li>● 医療用ICTサービス</li> <li>● ケアサポートサービス</li> </ul>  

# エコビジョン 2050

持続可能な地球・社会の実現を目指して「エコビジョン 2050」を策定

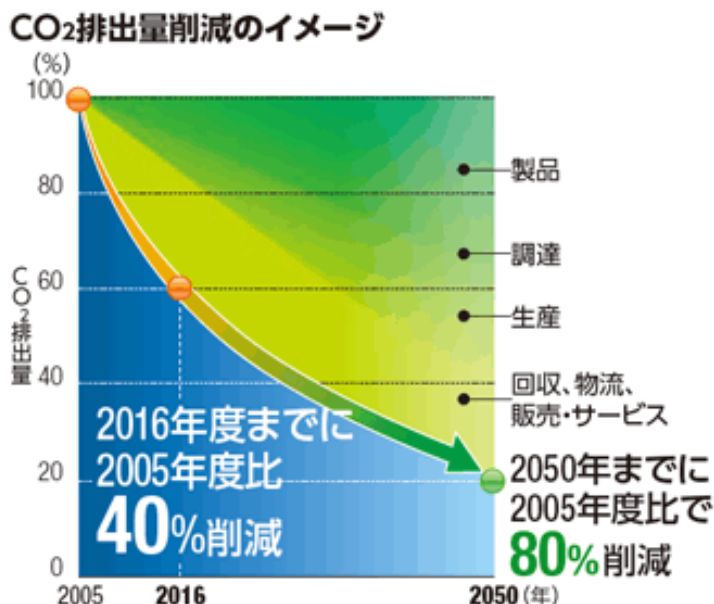
地球環境問題は喫緊の課題であり、環境負荷を抑制して持続可能な社会づくりを実現していくうえで、グローバル企業が大きな責任を有しています。コニカミノルタは、その実現に向けた決意を、2050年を見据えた長期環境ビジョン「エコビジョン 2050」に表しています。

また、「エコビジョン 2050」の実現に向けたマイルストーンとして、2016年度をターゲットとする「中期環境計画 2016」を策定しています。

> [「中期環境計画」](#)

**エコビジョン 2050**

1. 製品ライフサイクルにおける CO<sub>2</sub> 排出量を、2050 年までに 2005 年度比で 80%削減する。
2. 限りある地球資源の有効活用の最大化と資源循環を図る。
3. 生物多様性の修復と保全に取り組む。



## CO<sub>2</sub>排出量の目標設定の考え方

IPCC（気候変動に関する政府間パネル）の発表によれば、2004年の温室効果ガス排出量は490億t-CO<sub>2</sub>であり、これを世界人口64億人で割ると、年間1人当たり7.66t-CO<sub>2</sub>となります。一方、地球が許容できる温室効果ガスの自然吸収量は年間114億t-CO<sub>2</sub>といわれており、これを2050年の予測人口92億人で割ると、年間1人当たり1.24t-CO<sub>2</sub>となります。これは、現状の年間1人当たり排出量の約80%減に相当します。

これを根拠の一つとして、私たちは「エコビジョン2050」において、「2050年に2005年度比で製品ライフサイクルでのCO<sub>2</sub>排出量80%削減」という目標を設定しました。また、「中期環境計画2016」では、この目標からのバックカスティング※により、「2016年度までに2005年度比で40%削減」という目標を設定しています。

※ バックカスティング：将来のあるべき姿、ゴールを描いて、そのゴールから現在までを振り返って、今後にとるべき行動を明らかにする考え方。

# 環境方針

## コニカミノルタ環境方針

私たちコニカミノルタグループは、持続可能な発展と利益ある成長を目指し、環境・経済・社会の観点を企業戦略に融合することで、会社運営のすべての面で人と環境に調和した企業活動を進めます。

私たちは、「信頼性あるデータの確保と効果・影響の定量的な測定に基づき、環境課題の着実な解決に繋げることを」取り組みの基本姿勢とします。

## 「 -測定なくしてコントロールなし- 」

### 1.地球市民として持続可能な社会を目指して

私たちは、持続可能な社会に対応するため、環境保全、経済成長、社会性（倫理性）のパフォーマンスの継続的改善の観点をもって、事業活動を行います。私たち一人一人は、地球規模の環境・経済・社会に対して知識を深め、見識を持ち、持続可能な社会を目指して責任ある行動を行います。

### 2.法的及びその他の要求事項の遵守

私たちは、国内外の法的要求事項及び社内基準を遵守します。また、事業を取り巻く利害関係者の要求や、国際社会における合意に対しても公正に対応します。

### 3.製品・サービスの全ライフサイクルにわたる環境への配慮

私たちは、製品に対する責任はメーカーにあるとの認識をもち、製品・サービスの全ライフサイクルにわたる環境への配慮により、環境負荷の低減に努めます。

### 4.地球温暖化防止への取り組み

私たちは、地球温暖化が地球共通の重要課題であることを認識し、製品・サービスのライフサイクルの観点をもって、グループのあらゆる事業活動に由来する温室効果ガス排出量の継続的削減を行います。

### 5.循環型社会への対応

私たちは、循環型社会の形成の為に企業としてのできる対応策を常に見直し、資源使用を最小化するとともに、ゼロエミッション活動を積極的に推進・継続します。また、使用済み製品や包装材料などの回収・再資源化を加速度的にすすめます。

### 6.化学物質による汚染の予防及び環境リスクの低減

私たちは、化学物質が健康・安全・環境へ多大な影響を有することを認識し、化学物質の汚染の予防を図ります。また、環境へのリスクを低減するために、化学物質の使用量抑制と排出量削減を継続して行います。

## 7.情報公開の推進

私たちは、事業を取り巻く利害関係者に対して情報開示及びリスクコミュニケーションを積極的に行い、説明責任を果たすとともに、社会との共生に努めます。本方針は社外に対し公開します。

## 8.環境目的、目標の設定

私たちは、本方針を実現するために環境目的、目標、マネジメントプログラムを設定・運用し継続的な改善を図ります。

2014年4月1日  
コニカミノルタ株式会社  
代表執行役社長

山名昌衛



# マネジメントシステム

## 環境マネジメントシステム

ISO14001 に基づいたマネジメントシステムの運用を進めています。

環境経営をグループ全体で効率的に推進していくために、ISO14001 に基づいたマネジメントシステムを運用しており、全世界の生産拠点での ISO14001 認証取得を基本方針としています。

また、さまざまな環境課題に対して製品ライフサイクルの全段階で取り組むためには、生産拠点はもちろん、開発、販売、管理部門も含めたすべての拠点の環境活動を統一されたシステムのもとで運営し、効率的に連携していくことが必要だと考えています。この考えに基づき、グループの環境経営の要として、日本国内のグループ会社で ISO14001 のグループ統合認証を取得しています。

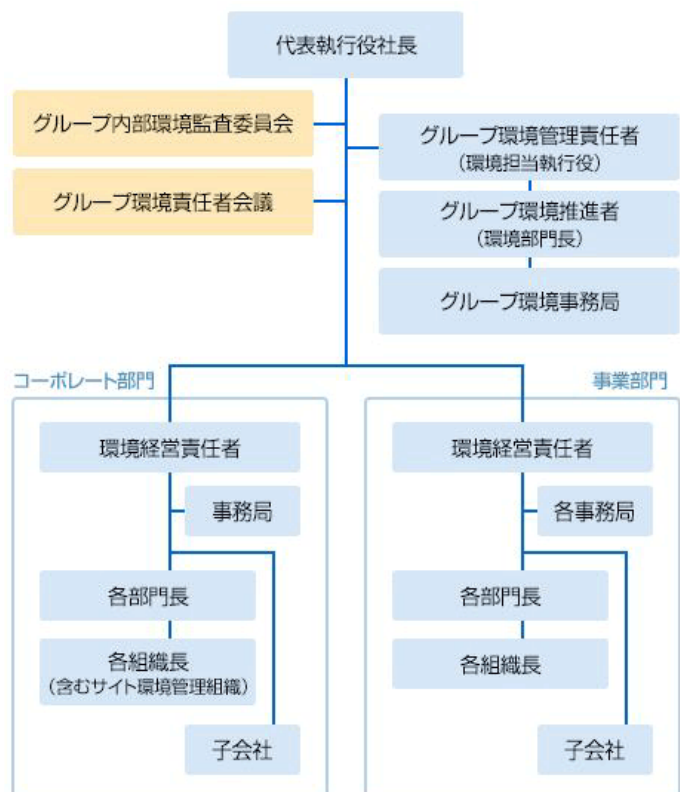
2015 年の ISO14001 改訂に対して、国内では 2016 年度より改訂対応に適用した活動を開始しています。2016 年に改訂版でのグループ統合認証を登録する計画です。海外生産拠点についても 2016 年度中に改訂対応した活動を開始し順次認証登録を進めます。

## 推進体制

「環境担当執行役」が、環境マネジメント全体を統括しています。

コニカミノルタ（株）は、グループ全体の環境に関する責任と権限を担う「環境担当執行役」を置いています。

また、グループ全体の環境目標実施計画を推進する機関として、環境部門長が主催する「グループ環境責任者会議」を設置しています。同会議は、各事業部門の環境経営責任者が参加し、グループ中期環境計画、年度目標実施計画の審議を行います。また、四半期ごとの進捗状況の確認やグループの環境課題に関する検討を行います。



■グループ環境マネジメント体制

## 環境監査

グループ内部の環境監査については、経営監査室が主導する「グループ内部環境監査委員会」が、環境監査全般にわたる指揮命令を担っています。

年に1回以上実施している内部環境監査で、マネジメントシステムの適合性・順法性を確認するほか、中期環境計画の推進状況などを確認することで、グループのすべての組織においてマネジメントシステムが有効に機能していることを確実なものとしています。

## 環境リスクマネジメント

コニカミノルタでは、環境リスクを経営リスクの一つと位置付け、取締役会で任命されたリスクマネジメント担当執行役を委員長とする、リスクマネジメント委員会のもとで管理を行い、リスクが顕在化することを未然に防止しています。

また、各地の生産拠点・販売会社がしかるべき環境法規に適切に対応できるよう、欧州・北米・中国・日本の環境組織を中核とした管理体制を構築しています。これらの体制のもと、関連する法規制への対応（各国の化学物質規制、製品含有規制、回収リサイクル規制、省エネルギー規制など）を行っています。

## 環境順法体制

地球温暖化や資源エネルギー問題をはじめ、地球環境問題の広域化・グローバル化が進む中、持続可能な成長を目指して各地域、各国レベルでの政策・規制の見直し・強化が進んでいます。

ワールドワイドに事業を展開しているコニカミノルタでは、生産、販売の各拠点において環境法規制が確実に順守されるよう、グローバル順法管理体制を強化しています。

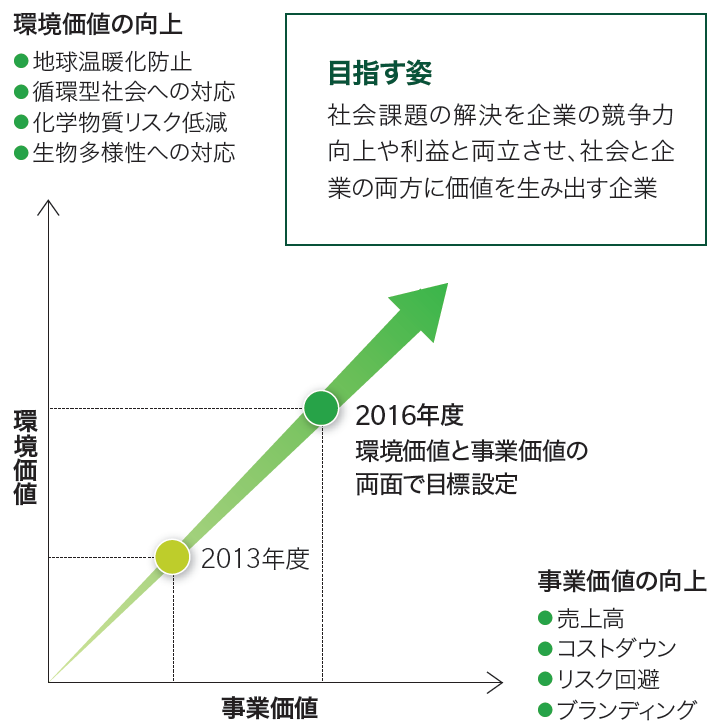
2015年度も、すべてのグループ生産拠点を対象に順法診断を実施するとともに、販売拠点についても新たな規制や法改正に対する順法状況を確認しましたが、環境関連法規制などに関する重大な違反はありませんでした。

# 中期環境計画

## 「中期環境計画 2016」のコンセプト

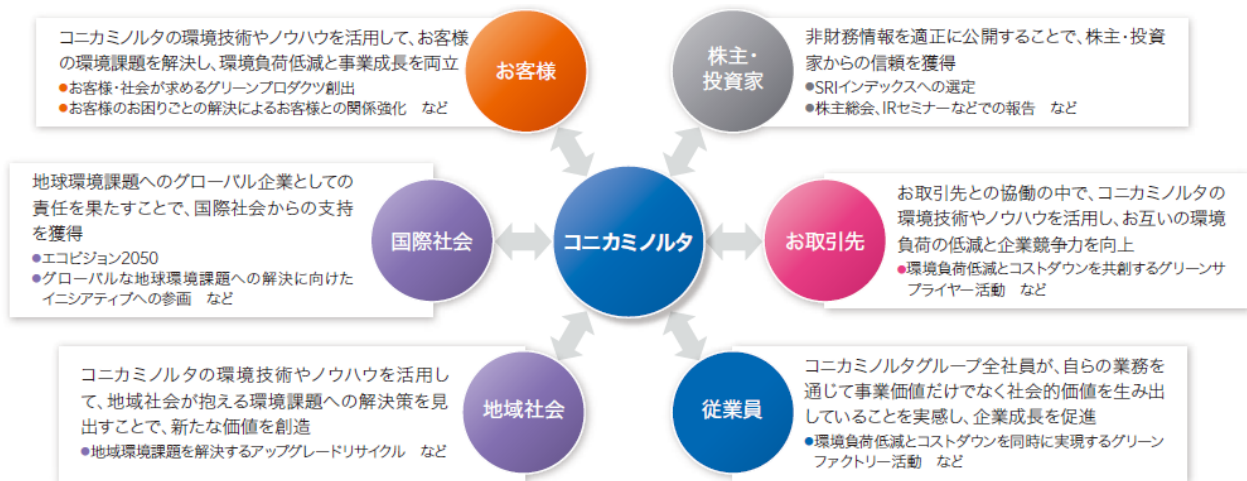
### “環境課題の解決”と“企業の成長”の両立

企業は社会に価値を提供し、その対価として利益を得ることで成長します。さらに、その事業に関わる幅広いステークホルダーへの社会的責任を果たすことで、企業の成長が持続できます。それは環境活動についても同様です。こうした考えにもとづき、「中期環境計画 2016」は、環境課題の解決に貢献する商品やサービスを提供すると同時に、そのプロセスを通じて企業の成長を実現するため、事業計画と連動した環境計画としています。



## ステークホルダーとともに価値を創造し、互いに成長

地球規模での環境課題を解決するには、自社内だけの取り組みでは限界があります。しかし、サプライチェーン全体、つまり部品の供給を受けるお取引先から、製品を提供するお客様まで、あらゆるステークホルダーと地球環境への想いを共有し、ともに取り組んでいくことによって、環境課題の解決への貢献をより大きなものへと発展させることができます。こうした考えのもと、コニカミノルタとステークホルダーがともに価値を創造し、成長していくことを目指す環境計画としています。



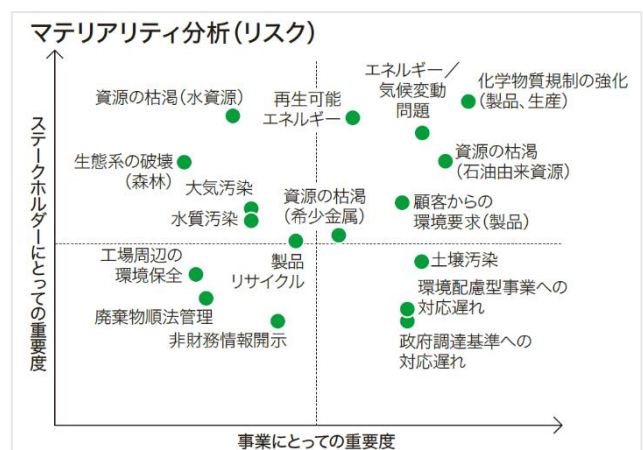
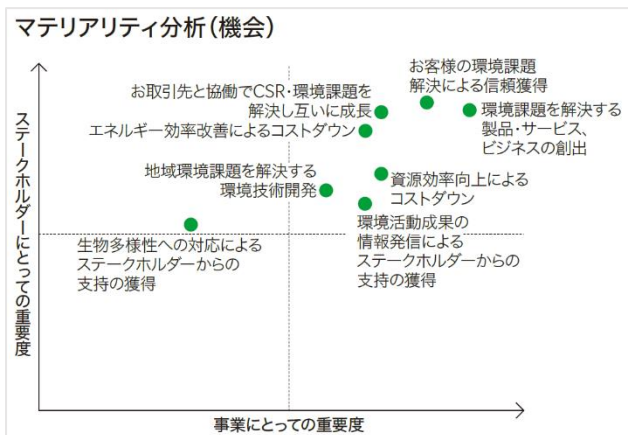
■ステークホルダーとの共創価値

## 事業と連動した重要課題と目標の設定

「中期環境計画 2016」では、コニカミノルタの事業に関わる環境要因を、機会、リスクそれぞれの側面を把握し、環境課題を解決することで、事業の強化にもつながる重要課題を設定しました。

その設定プロセスにおいては、データ収集や客観的な評価手法を用いて毎年レビューを行い、課題設定と計画の妥当性および進捗確認の有効性を担保しています。

こうした取り組みによって、商品力強化、販売・サービス収益、コストダウンといった事業強化の目標と環境課題における目標とを一致させることで、経営トップから組織全体にまで及ぶコミットメントとし、実効性の高い環境経営を実現しています。



## サプライチェーン、ライフサイクル全体を視野に

「エコビジョン 2050」では、製品開発から調達、生産、物流、販売・サービス、回収・リサイクルまでの各事業プロセスで環境負荷低減をコミットしています。

その実現に向けて、「中期環境計画 2016」では、事業プロセスの各段階で「グリーンプロダクツ（企画・開発）」「グリーンファクトリー（調達・生産）」「グリーンマーケティング（物流・販売・サービス・回収リサイクル）」の「3つのグリーン活動」を重要テーマとし、グローバルに展開します。これにより、サプライチェーン、ライフサイクル全体を視野に入れた環境計画としています。



コニカミノルタでは、この「3つのグリーン活動」を軸に、「事業価値」と「環境価値」の両面で、それぞれ具体的目標を設定しています。

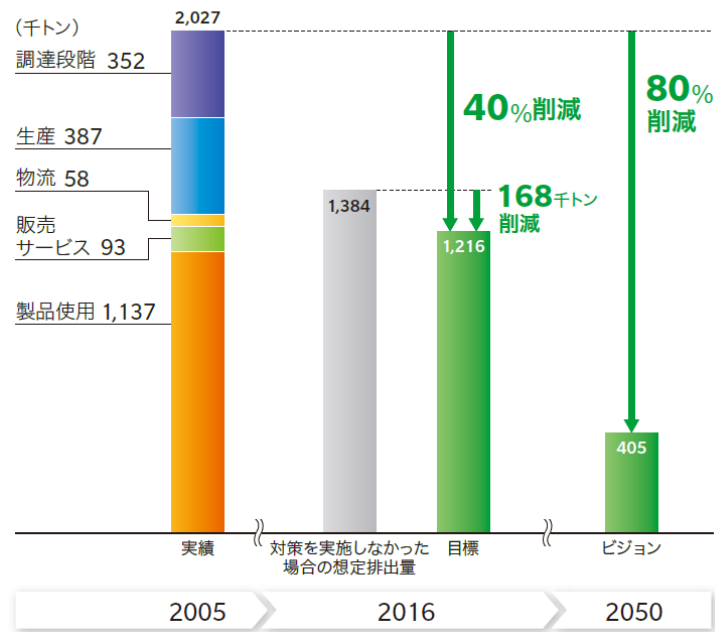
### 2016 年度の重要目標

<p><b>環境価値</b></p> <p>エコビジョン2050を実現するためのマイルストーン</p>	<p>1.地球温暖化防止 …………… 製品ライフサイクルCO<sub>2</sub>排出量40%削減(2005比)：2,027千トン(2005)→1,216千トン(2016) CO<sub>2</sub>削減効果量：168千トン</p> <p>2.循環型社会対応 …………… 資源有効利用量：33千トン</p> <p>3.化学物質リスク低減 …… 製品関連環境規制、エミッションへの確実な対応</p> <p>4.生物多様性保全 …………… 水資源への配慮</p>
<p>↑ ↓ 社会と事業の両方に価値を生み出す</p>	
<p><b>事業価値</b></p>	<p>1.売上貢献 …………… グリーンプロダクツ売上高：6,400億円(売上比率60%) お客様の環境要求での販売機会損失ゼロ 環境を活用した販売機会創出</p> <p>2.コストダウン …………… 環境関連活動(製品・調達・生産・物流)によるコストダウン</p> <p>3.リスク回避 …………… 製品・生産関連環境規制への対応不備による販売・生産影響ゼロ</p> <p>4.ブランディング …………… 主要SRIインデックスへの継続選定</p>

「エコビジョン 2050」を実現するためのマイルストーンとして、製品ライフサイクルにおける CO<sub>2</sub> 排出量を 2016 年度までに 2005 年度比で 40%削減することを中期目標としています。

この削減値 40%に到達するためには、168 千トンの削減が必要であり、これを「中期環境計画 2016」の各重要課題の削減目標に展開しています。

### 製品ライフサイクルCO<sub>2</sub>排出量の削減目標



また、この達成に向けた各スコープでの CO<sub>2</sub> 排出量削減を下記のように見込んでいます。

スコープ 1、2（開発・生産・販売サービス活動）：

2005 年度比総量-8%【売上高原単位-11%】

（エネルギー使用量：2005 年度比総量-12%【売上高原単位-14%】）

スコープ 3（調達、物流、製品使用）：

2005 年度比総量-50%【売上高原単位-52%】

## 中期環境計画 2016 目標

### 中期環境計画 2016

重点テーマ	重要課題	2016 年度目標	
		企業価値	環境価値
グリーンプロダクツ (企画・開発)	(1) お客様・社会が求めるグリーンプロダクツの創出と訴求	<b>【売上高】</b> ● グリーンプロダクツ売上高：6,400 億円（売上比率：60%） <b>【コストダウン】</b> ● 製品の材料コストダウン	<b>【地球温暖化防止】</b> ● 製品使用時の CO <sub>2</sub> 削減効果：59 千トン ● 調達段階での CO <sub>2</sub> 削減効果：105 千トン <b>【循環型社会への対応】</b> ● 資源有効利用量：33 千トン <b>【化学物質リスク低減】</b> ● エミッションへの確実な対応
	(2) 政府調達基準・環境ラベルへの対応	<b>【売上高】</b> ● 販売機会損失ゼロ	<b>【環境全般】</b> ● 基準・ラベル適合による環境負荷低減
	(3) 製品関連法規制への確実な対応	<b>【リスク回避】</b> ● 販売影響ゼロ	<b>【化学物質リスク低減】</b> ● 法規制適合による有害化学物質リスク低減
グリーンファクトリー (調達・生産)	(1) コスト競争力につながるグリーンファクトリー活動	<b>【コストダウン】</b> ● エネルギー、材料コストダウン（ロス削減）	<b>【地球温暖化防止】</b> ● 生産活動の CO <sub>2</sub> 削減効果：4 千トン <b>【循環型社会への対応】</b> ● 資源有効利用量：0.3 千トン <b>【生物多様性への対応】</b> ● 水資源の持続可能な活用
	(2) 地域環境課題を解決するアップグレードリサイクル	<b>【コストダウン】</b> ● 材料コストダウン	<b>【循環型社会への対応】</b> ● 資源有効利用：再生材適用拡大による資源循環
	(3) コスト競争力につながるサプライヤーとの協働	<b>【コストダウン】</b> ● エネルギー、材料コストダウン（ロス削減）	<b>【地球温暖化防止】</b> ● 調達先での CO <sub>2</sub> 削減 *対象サプライヤーごとに合意して設定 <b>【循環型社会への対応】</b> ● 資源有効利用 *対象サプライヤーごとに合意して設定
	(4) 生産関連法規制への確実な対応	<b>【リスク回避】</b> ● 生産影響ゼロ	<b>【環境全般】</b> ● 法規制適合による環境負荷低減
グリーンマーケティング (物流・販売・サービス・回収リサイクル)	(1) お客様の環境課題の解決	<b>【売上高】</b> ● 販売機会の獲得	<b>【環境全般】</b> ● お客様での環境負荷低減
	(2) サプライチェーン最適化と連動した環境活動	<b>【コストダウン】</b> ● 物流、包装コストダウン	<b>【地球温暖化防止】</b> ● 物流時の CO <sub>2</sub> 削減効果：0.3 千トン <b>【循環型社会への対応】</b> ● 資源有効利用量：0.45 千トン
	(3) 製品の 3R 活動	<b>【リスク回避】</b> ● 3R 活動の強化	<b>【循環型社会への対応】</b> ● 製品 3R による資源の有効利用

注：2016 年度目標は一部変更していますが、ライフサイクル CO<sub>2</sub> 40%削減の必達目標は変更ありません。

# 2015 年度目標・実績

2015 年度の目標・実績

## グリーンプロダクツ（企画・開発）

2015 年度目標		2015 年度実績			
事業価値	環境価値	事業価値		環境価値	
<b>(1) お客様・社会が求めるグリーンプロダクツの創出と訴求</b>					
<b>【売上高】</b> ・グリーンプロダクツ売上高：5,900 億円（売上比率：54%） <b>【コストダウン】</b> ・製品の材料コストダウン	<b>【地球温暖化防止】</b> ・製品使用時の CO <sub>2</sub> 削減効果：50 千トン ・調達段階の CO <sub>2</sub> 削減効果：83 千トン <b>【循環型社会への対応】</b> ・資源有効利用量：27 千トン <b>【化学物質リスク低減】</b> ・エミッションへの確実な対応	<b>【売上高】</b> ・グリーンプロダクツ売上高：5,907 億円（売上比率：57%） <b>【コストダウン】</b> ・製品の材料コストダウン	○	<b>【地球温暖化防止】</b> ・製品使用時の CO <sub>2</sub> 削減効果：51.5 千トン ・調達段階の CO <sub>2</sub> 削減効果：93 千トン <b>【循環型社会への対応】</b> ・資源有効利用量：27.7 千トン <b>【化学物質リスク低減】</b> ・エミッションへの確実な対応	○
<b>(2) 政府調達基準・環境ラベルへの対応</b>					
<b>【売上高】</b> ・販売機会損失ゼロ	<b>【環境全般】</b> ・基準・ラベル適合による環境負荷低減	<b>【売上高】</b> ・販売機会損失ゼロ	○	<b>【環境全般】</b> ・基準・ラベル適合による環境負荷低減	○
<b>(3) 製品関連法規制への確実な対応</b>					
<b>【リスク回避】</b> ・販売影響ゼロ	<b>【化学物質リスク低減】</b> ・法規制適合による有害化学物質リスク低減	<b>【リスク回避】</b> ・販売影響ゼロ	○	<b>【化学物質リスク低減】</b> ・法規制適合による有害化学物質リスク低減	○

## グリーンファクトリー（調達・生産）

2015 年度目標		2015 年度実績			
事業価値	環境価値	事業価値		環境価値	
<b>(1) コスト競争力につながるグリーンファクトリー活動</b>					
<b>【コストダウン】</b> ・エネルギー、材料コストダウン（ロス削減）	<b>【地球温暖化防止】</b> ・生産活動の CO <sub>2</sub> 削減効果：1.7 千トン <b>【循環型社会への対応】</b> ・資源有効利用量：0.55 千トン <b>【生物多様性への対応】</b> ・水資源の持続可能な活用	<b>【コストダウン】</b> ・エネルギー、材料コストダウン（ロス削減）	○	<b>【地球温暖化防止】</b> ・生産活動の CO <sub>2</sub> 削減効果：2.85 千トン <b>【循環型社会への対応】</b> ・資源有効利用量：0.75 千トン <b>【生物多様性への対応】</b> ・水資源の持続可能な活用	○



<b>(2) 地域環境課題を解決するアップグレードリサイクル</b>					
<b>【コストダウン】</b> ・材料コストダウン	<b>【循環型社会への対応】</b> ・資源有効利用：再生HDPEのトナーボトルへの適用拡大	<b>【コストダウン】</b> ・材料コストダウン	○	<b>【循環型社会への対応】</b> ・資源有効利用：再生HDPEのトナーボトルへの適用拡大	○
<b>(3) コスト競争力につながるサプライヤーとの協働</b>					
<b>【コストダウン】</b> ・エネルギー、材料コストダウン（ロス削減）	<b>【地球温暖化防止】</b> ・調達先でのCO <sub>2</sub> 削減効果：0.4千トン <b>【循環型社会への対応】</b> ・資源有効利用量：0.1千トン	<b>【コストダウン】</b> ・エネルギー、材料コストダウン（ロス削減）	○	<b>【地球温暖化防止】</b> ・調達先でのCO <sub>2</sub> 削減効果：0.47千トン <b>【循環型社会への対応】</b> ・資源有効利用量：0.13千トン	○
<b>(4) 生産関連法規制への確実な対応</b>					
<b>【リスク回避】</b> ・生産影響ゼロ	<b>【環境全般】</b> ・法規制適合による環境負荷低減	<b>【リスク回避】</b> ・生産影響ゼロ	○	<b>【環境全般】</b> ・法規制適合による環境負荷低減	○

### グリーンマーケティング（物流・販売・サービス・回収リサイクル）

2015 年度目標		2015 年度実績			
事業価値	環境価値	事業価値		環境価値	
<b>(1) お客様の環境課題の解決</b>					
<b>【売上高】</b> ・販売機会の獲得	<b>【環境全般】</b> ・お客様での環境負荷低減	<b>【売上高】</b> ・販売機会の獲得	○	<b>【環境全般】</b> ・お客様での環境負荷低減	○
<b>(2) サプライチェーン最適化と連動した環境活動</b>					
<b>【コストダウン】</b> ・物流、包装コストダウン	<b>【地球温暖化防止】</b> ・物流時のCO <sub>2</sub> 削減効果：0.3千トン <b>【循環型社会への対応】</b> ・資源有効利用量：0.3千トン	<b>【コストダウン】</b> ・物流、包装コストダウン	△	<b>【地球温暖化防止】</b> ・物流時のCO <sub>2</sub> 削減効果：0.27千トン <b>【循環型社会への対応】</b> ・資源有効利用量：0.25千トン	△
<b>(3) 製品の3R活動</b>					
<b>【リスク回避】</b> ・3R活動の強化	<b>【循環型社会への対応】</b> ・製品3Rによる資源の有効利用	<b>【リスク回避】</b> ・3R活動の強化	△	<b>【循環型社会への対応】</b> ・製品3Rによる資源の有効利用	△

## 社会からの評価・表彰

コニカミノルタの環境活動は、さまざまな団体・企業などから評価をいただいています。

### CDP から気候変動に関する活動に対して最高評価

コニカミノルタ（株）は、気候変動情報開示に関する質の高い活動に対して、国際的な非営利団体 CDP から高い評価を受け、「クライメート・ディスクロージャー・リーダーシップ・インデックス 2015(以下 CDLI)」に 3 年連続で選定されました。これは、コニカミノルタが気候変動戦略、温暖化ガス排出量の算定と管理、リスクマネジメントの過程と結果について包括的に開示していること、すなわち、気候変動情報を高い透明性をもって世の中に提供していることを示しています。(2015 年 11 月)



> [ニュースリリース](#) : CDP により気候変動情報開示先進企業(CDLI)に 3 年連続で選定

### 第 19 回「環境経営度調査」で製造業総合ランキング 1 位を獲得

コニカミノルタ（株）は、日本経済新聞社が実施した第 19 回「環境経営度調査」において、2 年連続で製造業総合ランキング 1 位を獲得しました。今回の評価においては、「環境経営推進体制」でトップ評価を受け、その他の側面でもまんべんなく高評価を獲得しました。(2016 年 1 月)

> [ニュースリリース](#) : 第 19 回『環境経営度調査』で 2 年連続製造業総合ランキング 1 位を獲得

### 国際的な SRI インデックスから環境側面の取り組みに対して高い評価

コニカミノルタ（株）は、国際的な SRI（社会的責任投資）調査・格付け機関から、環境側面の取り組みに対して高い評価を得ています。

S&P Dow Jones Indices がスイスの RobecoSAM と共同で提示する株式指標「Dow Jones Sustainability World Index」(DJSI World) の構成銘柄に、2012 年から連続で採用 (2015 年 9 月) されています。また、RobecoSAM による CSR 格付けでは、気候変動に関する戦略や環境方針・マネジメントなどの環境側面の取り組みが高い評価を得て、「シルバークラス 2016」に選定されています。

イギリスの FTSE Russell による調査では、「汚染対策・資源有効利用」で最高評価を獲得し、環境側面全般で高評価を受け、FTSE4Good インデックスの構成銘柄に 2003 年から連続して選定 (2016 年 8 月) されて

います。

ドイツの oekom research AG による調査では、省エネ・省資源活動で最高評価を獲得したほか、中期環境計画とその推進、再生材利用の独自技術、化学物質管理、環境規格対応などの環境取り組みが評価され、電子デバイス・機器産業をリードする企業として「Prime (プライム)」の認定 (2016 年 2 月) を受けています。



### 「香港グリーンアワード」で「銀賞」を受賞

香港の情報機器販売会社であるコニカミノルタビジネスソリューションズ (香港) 社は、香港グリーンカウンシルが主催する「香港グリーンアワード 2015」において、「銀賞」を受賞し 4 年連続で入賞しました。(2015 年 12 月)



> [ニュースリリース \(英語\)](#) □

# グリーンプロダクツ認定制度

## 制度の概要

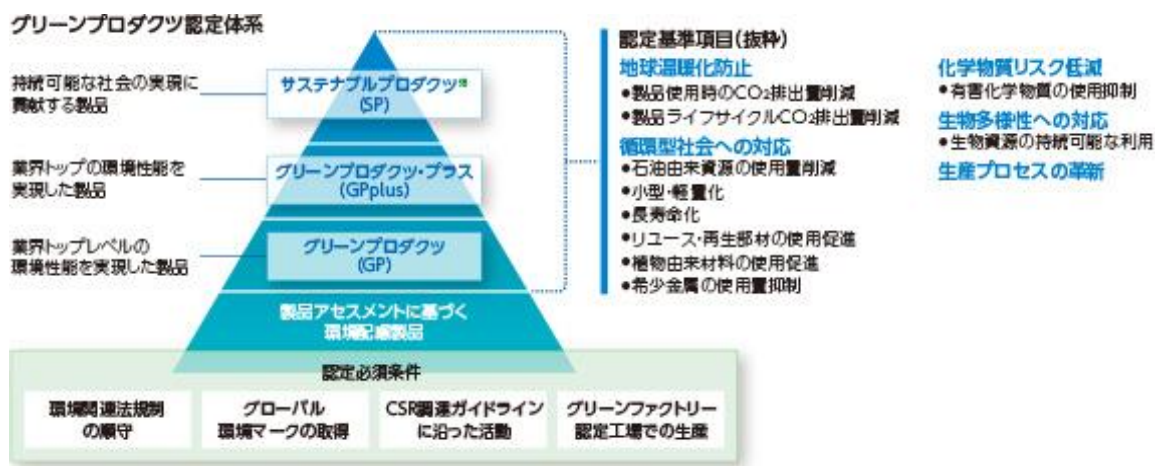
お客様や社会の環境負荷低減に貢献しながら、自社の収益向上にも貢献する競争力の高い製品開発に努めています。



コニカミノルタは、優れた環境性能を持つ製品を評価・認定する独自の「グリーンプロダクツ認定制度」を導入し、2011年度から運用しています。この制度は、事業や製品特性に合わせた環境価値を創出し、お客様や社会での環境負荷低減に貢献することを目的とするものです。世界各国で運用されている環境ラベルの基準に適合しつつ、より環境負荷を低減する製品を提供するために、独自の制度を導入しています。

グリーンプロダクツとして認定されるには、環境課題に応じた認定基準項目について、事業や製品特性ごとに設定した基準をクリアする必要があります。製品の企画段階から達成すべき目標を設定し、その達成度に応じて3段階のレベルで認定します。

「中期環境計画 2016」では、グリーンプロダクツ認定製品の売上高比率を高めることを目標に設定しています。その達成に向けて、お客様や社会の環境負荷低減と、自社の収益向上にも貢献する競争力の高い製品開発を進めるとともに、認定製品の環境性能を製品カタログやウェブサイトなどで開示し、社会への普及拡大に努めています。



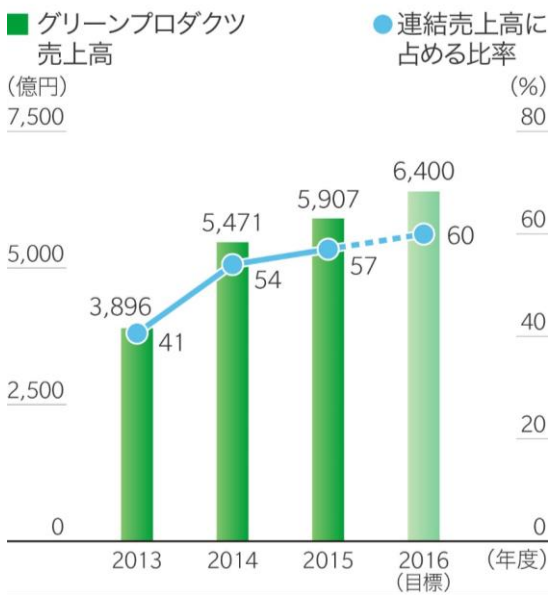
※ SP の認定基準は、「独自の技術を搭載し、従来製品では実現が困難な環境負荷低減を実現する製品」と規定しています。すべての製品において環境負荷低減を図るとともに、技術革新を促進し、持続可能な社会の実現に積極的に貢献することを目指して、難易度の高い認定レベルとしています。

## 2015 年度の実績

2015 年度は新たに 35 機種の新製品を創出し、累計で 182 機種となりました。2015 年度のグリーンプロダクトによる売上高は 5,907 億円となり、グループ連結売上高に占める割合が 57%に達しました。2014 年度の 54% (5,471 億円) から売上を伸ばし、お客様や社会の環境負荷低減と、自社の収益向上に貢献しました。

なお、2015 年度のグリーンプロダクトによる製品使用時の CO<sub>2</sub> 削減効果は 51.5 千トン、資源有効利用量は 27.7 千トンとなりました。

### グリーンプロダクトの売上高比率



## 製品の省エネ・温暖化防止

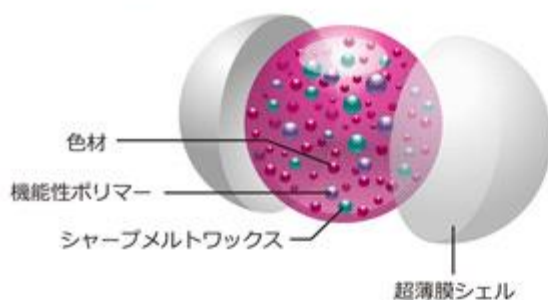
### 情報機器の省エネルギー化

#### ■ 低温で定着できる「デジタルトナーHD」

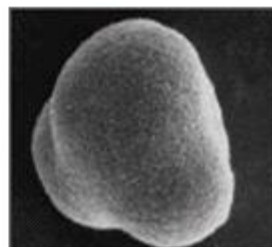
複合機では、用紙にトナーを定着させる際に加熱する必要があり、そのための消費電力が全体の6割以上を占めています。コニカミノルタでは、より低温で定着できるトナーの研究開発を進め、独自開発による重合法トナー「デジタルトナーHD」を開発。定着温度を従来機種より約25℃下げること的成功し、消費電力の削減に貢献しています。

また、重合法トナーは、従来の粉砕法トナーに比べて粉砕工程がない分だけ、トナーの製造段階における消費エネルギーも低減できます。

デジタルトナーHD<sup>E</sup>



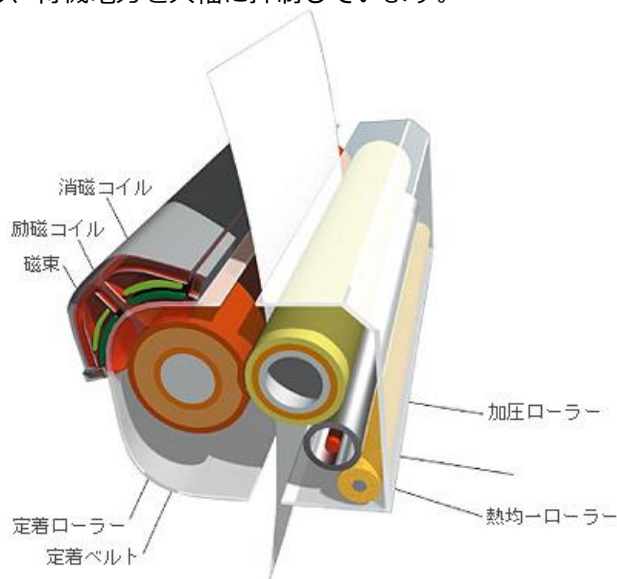
電子顕微鏡で見たトナー粒子



> [関連ページ：デジタルトナー](#)

#### ■ 待機電力を削減する「IH 定着システム」

複合機でプリントを開始するには、定着ローラーを所定温度まで加熱する必要があります。コニカミノルタは、加熱効率の高いIH（Induction Heating）技術を定着ユニットに採用することで、低い待機温度からでも急速に温めることを可能にし、待機電力を大幅に抑制しています。



■ IH 定着システム

## ■ スキャン時の消費電力を削減する LED 光源

複合機のスキャナー光源として、蛍光灯よりも省電力性にすぐれた LED を採用しています。原稿照射の明るさがアップしたことでスキャンスピード高速化にもつながっています。

## ■ 未使用時の消費電力を削減する「パワーセーブ機能」

複合機を一定時間使用しなかった場合には、自動的に操作パネルの表示を消すなどして節電状態にする「パワーセーブ機能」を搭載しています。パワーセーブ中でも FAX や PC からのプリント受信が行え、自動的に通常モードに復帰するため、日常の業務を妨げません。



## ■ 業務効率を下げずに節電できる「近接センサー」

指を複合機の操作パネルに近づけるだけで、自動的にスリープモードから復帰する近接センサーを内蔵しています。このため、スリープモードからの復帰にボタンを押すなどの手間がかからず、業務効率を下げることなく節電できます。



## ■ 必要な箇所だけ通電する節電設計

スリープ状態でのプリント出力時にはコントロールパネルを起動させない、スキャナーや FAX の使用時には定着ヒーターの起動を抑えるなど、機能ごとに必要な箇所だけを通電させる節電設計により、消費電力を最小限に抑えています。

## ■ ミスプリントを低減する「プリントプレビュー」

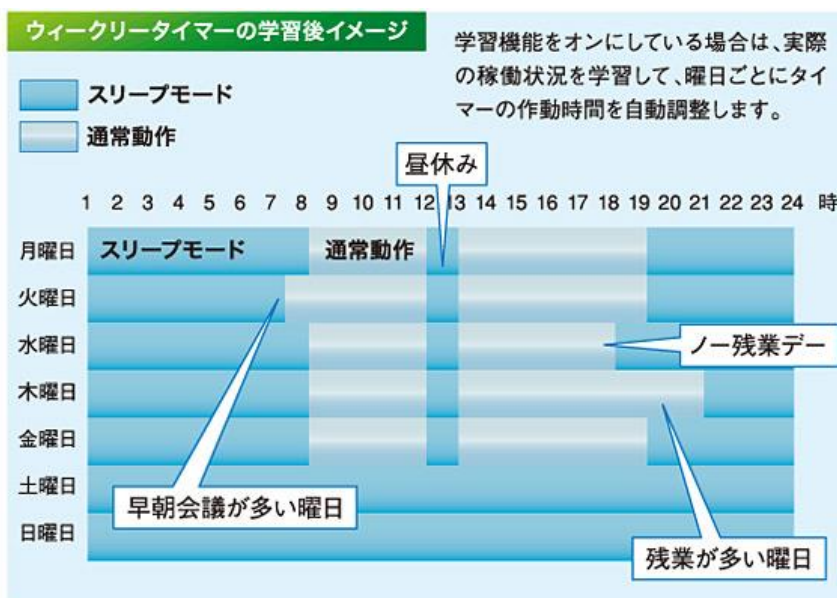
プリントする前に、仕上がり状態を本体の液晶画面上のプレビューで確認できるため、ミスプリントを防止できます。用紙の節約はもちろん、ムダな消費電力も削減できます。



プリントプレビュー画面

## ■ 学習機能がついた「ウィークリータイマー」

あらかじめ指定した時刻に、通常モードと節電モードを自動で切替える「ウィークリータイマー」により、昼休みや夜間、休日など、オフィスの使用状況に合わせて効率的に節電できます。4週間分の使用データを採取して、タイマー設定と実際の使用状況が異なる場合には自動で修正する学習機能も搭載。より節電効果の高い運用管理が行えます。





## 利用者のエコ意識を高める「ECO 指標表示」

利用者のエコ意識を高めるため、環境への貢献度をグラフ表示します。電力消費量やトナー・用紙使用量など指標ごとの削減量を操作パネルに表示し、部門ごとやユーザーごとにも確認できます。



※上記の機能・技術は、機種によって搭載していないものもあります。

## 社会の温暖化防止に貢献する機能材料

### 環境負荷の少ない次世代照明「有機 EL 照明」

電圧をかけることで発光する有機材料を利用した有機 EL 照明は、薄く、軽く、面光源という従来の照明にない特長に加え、高いエネルギー利用効率や少ない発熱、蛍光灯のように水銀を使用しないなど、環境負荷の少ない次世代照明として注目されています。

コニカミノルタでは、独自の技術力を活かして、早くから有機 EL 照明の実用化に向けた研究開発を推進。2014 年 6 月には、一般的な LED 照明を上回る、139lm/W という有機 EL 照明としては世界最高の発光効率※を実現しました。

2015 年度には、「有機 EL 用青色りん光材料の創成と、それを用いた高効率・高耐久発光デバイスの開発」に対して、平成 26 年度「化学技術賞」（主催：一般社団法人近畿化学協会）を受賞しました。

※2014 年 6 月現在。



有機 EL 照明として世界初のフラワーイルミネーション「光る有機 EL チューリップ」

### 冷房のためのエネルギー低減に貢献する「車載用遮熱フィルム」

コニカミノルタの車載用遮熱フィルムは、画期的な「波長コントロール技術」によって熱線や紫外線をブロックするとともに、独自に開発した UltraNano 粒子により熱源となる赤外線を 95%以上カットしています。車内への熱の侵入を大幅に削減し、快適な車内環境を実現するほか、冷房のための電力使用を低減して燃費向上にも貢献します※。

※当社実証試験による

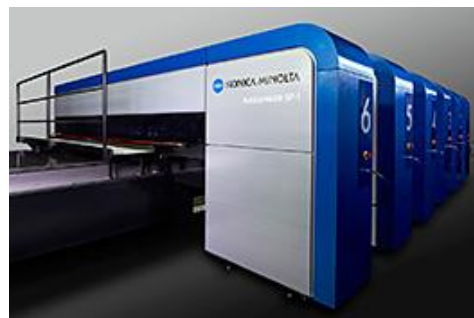


車載用遮熱フィルム

## 捺染工程の省エネルギーに貢献する産業用インクジェット

### オンデマンド生産により消費電力を低減するテキスタイルプリンター

テキスタイル分野で使用されるインクジェットテキスタイルプリンターは、従来のスクリーン捺染で必要とされていた製版や色糊調合が不要です。さらに、必要な素材に必要な量だけインクを使用するオンデマンド生産が可能のため、従来のスクリーン捺染と比較して、電気エネルギー消費量を 57%低減できます。加えて、お客様先での生産効率を高めることで、空調・照明などの省エネにも貢献します。



インクジェットテキスタイルプリンター  
「ナッセンジャー SP-1」

## 省エネルギーに貢献するプラネタリウム

### LED 光源採用により消費電力を低減するプラネタリウム

従来の性能仕様を向上させ、光源をメタルハライドランプから LED 光源に変更することでエネルギー使用量を大幅に低減した「インフィニウム Σ」を発売しました。

LED 光源採用により、恒星、惑星、太陽、月、ブライトスターの明るさ、色調再現を大幅に向上させるとともに、使用時のエネルギー使用量（CO<sub>2</sub> 排出量）を約 50%以上削減しています。

また流体力学を用いた冷却方法、静音ファンの採用により、今までにない静音性を実現しています。



「インフィニウム Σ」

## 製品の省資源・リサイクル

### 材料の価値を高めるアップグレードリサイクル(再生材の適用)

#### 使用済みペットボトル・PC ガロンボトルを複合機の外装材に再生

コニカミノルタは、使用済みペットボトルおよびガロンボトルを複合機の外装材にリサイクルするため、強度や難燃性、成型容易性を向上させる技術開発に取り組んできました。ケミカルプロセッシング技術をさらに進化させ、PCR 比率<sup>※</sup>を約 70%まで高めた再生 PC/PET の開発に成功しました。外装材部分への使用を拡大しております。

※PCR（post-consumer recycling）比率：再生素材中で使用される市中回収材料の割合



再生PC/PET（再生素材使用箇所）



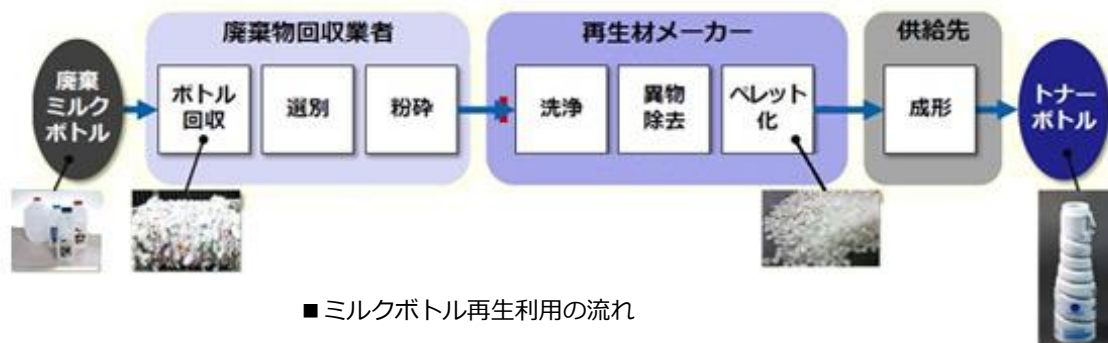
再生 PC/PET を採用した「bizhub C368 シリーズ」

#### 使用済みミルクボトルをトナーボトルに再生

コニカミノルタでは、北米で広く流通するポリエチレン製ミルクボトルを複合機用のトナーボトルにリサイクルしています。牛乳のにおいや品質悪化につながる微細細胞を取り除く洗浄技術を開発し、メキシコとマレーシアでの量産体制を確立しました。トナー容器の原材料における PCR 比率<sup>※</sup>は 40%にまで高めることに成功しており、今後は 100%に引き上げることを目指します。



再生素材で生産したトナーボトル



## 複合機の内装材に使用済み遊技機の再生 ABS を使用

使用済み遊技機から回収した ABS 樹脂をアップグレードリサイクルして、難燃性を向上させた再生 ABS を開発しました。2016 年度から内装材に採用を開始する予定です。

## 情報機器の小型化軽量化

製品の小型化・軽量化は、原材料使用量や製造時のエネルギー消費の削減、廃棄時の環境負荷軽減に大きく寄与します。コニカミノルタは、コア技術を活かした技術開発によって、情報機器の性能を向上させつつ小型化・軽量化を図り、環境負荷の少ない製品開発を積極的に進めています。

### ■ 2015 年度に発売したコンパクトデザインの製品

幅 585mm 奥行 660mm の小さな設置面積を実現した  
省スペース設計の A3 カラー複合機  
bizhub C287/C227

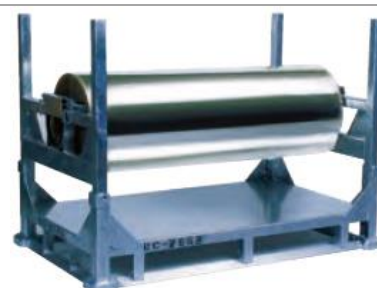


## 機能材料での省資源

### 液晶偏光板を保護する TAC フィルムの薄膜化

コニカミノルタでは、強みとする製膜技術を活かして、液晶ディスプレイの偏光板を保護する TAC<sup>※</sup>フィルムの薄膜化を推進。ノート PC やスマートフォンなど情報機器の軽量化はもちろん、使用する材料を削減することで省資源化にも貢献しています。

※TAC：トリアセチルセルロースという物質名の略称



TAC フィルム

### 斜め配向の「QWP フィルム」により、偏光板メーカーの生産性を飛躍的に向上

コニカミノルタ独自の光学設計技術と、セルロース系材料の光学特性を活かし、偏光サングラス着用時でもディスプレイの本来の色を再現することができる斜め配向の「QWP フィルム」を開発しました。

光学軸が斜め配向なので、偏光板生産時に、フィルムをシートにカットして斜めに貼りあわせる工程が不要なため、ロール・ツー・ロール方式の偏光板生産が可能となり、偏光板メーカーの生産性を飛躍的に向上させることができます。さらに、「QWP フィルム」は、偏光サングラス対応フィルムと偏光板保護フィルムの機能を 1 枚で果たすことができるため、ディスプレイの薄型化や部品数削減にも貢献します。

## 偏光サングラス着用時の見え方イメージ



※「PET フィルムあり」は、「QWP フィルム」の代わりに PET（ポリエチレンテレフタレート）フィルムを使用した場合の一例です。

## ヘルスケア製品の軽量化

### カセット型デジタル X 線撮影装置

小型・軽量で持ち運びが容易なデジタル X 線撮影装置「AeroDR」シリーズは、フィルム撮影に比べて患者さんの X 線被曝量を低減でき、高精度な画像をすぐに表示できる DR（デジタルラジオグラフィ）の普及に貢献する製品です。利用の拡大にとまない、さらなる軽量化が求められるなか、2015 年 8 月には、14×17 インチサイズのワイヤレスタイプ可搬型 DR として、世界最軽量 2.5kg<sup>※</sup>を実現した「AeroDR PREMIUM1417S」を発売しました。筐体および構成部品の設計を見直すことで、従来の「AeroDR」よりも約 10%の軽量化に成功しました。パネルを片手で掴みやすいようグリップ性にもこだわり、さらに持ち運びしやすい可搬型 DR に進化しています。

※2015 年 8 月 1 日現在。14×17 インチサイズのワイヤレスタイプ可搬型 DR において。



AeroDR PREMIUM1417S

### 超音波診断装置

超音波診断装置「SONIMAGE」シリーズは、リアルタイムに画像を観察できるため、幅広い臨床領域で使用されています。2014 年 7 月に発売した「SONIMAGE HS1」では、本体重量 35kg という、従来機<sup>※</sup>と比較して 45%の軽量化を実現しています。

※従来機：SONIMAGE 613

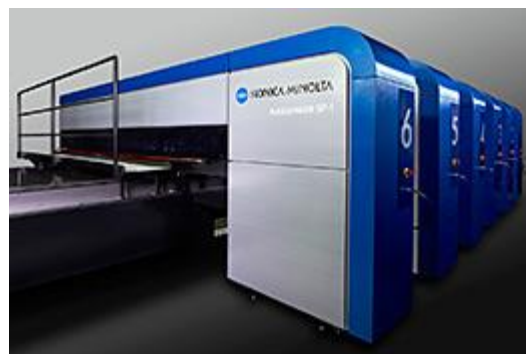


SONIMAGE HS1

## 捺染工程の省資源に貢献する産業用インクジェット

### ■ インクジェット方式で水資源使用などを低減するテキスタイルプリンター

テキスタイル分野で使用されるインクジェットテキスタイルプリンターは、従来のスクリーン捺染で必要とされていた製版や色糊調合が不要です。さらに、必要な素材に必要な量だけインクを使用するオンデマンド生産が可能のため、資源使用量や廃棄物の削減に貢献します。従来のスクリーン捺染と比較して、糊剤投入量は 97%減、水資源の使用は 62%減と、環境負荷を大きく低減します。



インクジェットテキスタイルプリンター  
「ナッセンジャー SP-1」

## 製品の化学物質管理

### 製品に含まれる化学物質の管理

コニカミノルタでは、複合機やプリンターなどの情報機器製品、産業用プリンターおよびそれらの消耗品であるトナー・インクの化学製品、また医療機器、計測機器、光学部品、機能材料も製造・販売しています。製品を対象とした化学物質規制が世界的に厳しさを増すなかで、これら幅広い製品をグローバルに事業展開できるように、法令順守はもちろん、製品の環境性能・安全性を担保できる社内基準を策定し、適切な化学物質管理を実現しています。

#### RoHS 指令<sup>※</sup>への対応

2006 年に製品中への特定有害物質の含有を制限する欧州 RoHS 指令が発効して以降、欧州以外の地域でもこの基準への準拠を要請する声が広がってきています。適用対象の製品分野も段階的に拡大し、2014 年には医療機器・制御監視機器も適用対象となりました。

コニカミノルタでは発効当初より、販売地域に関係なく、すべての製品を対象として RoHS 指令に基づく化学物質管理を行っています。2011 年の改定時には、化学物質管理の仕組みを再点検し、改訂基準適合の宣言などを実施しました。

RoHS 指令は、今後、制限物質への特定フタレートの追加（2019 年 7 月より発効）、用途除外の廃止など、さらに厳しくなっていますが、これからも改定動向を的確に把握し、計画的に対応を進めていきます。

※ RoHS 指令：電気電子機器に含まれる特定有害物質の使用制限に関する指令

#### REACH 規則<sup>※</sup>への対応

欧州 REACH 規則は、既存・新規にかかわらず、すべての化学物質を対象に、その使用に際して登録・評価・認可・制限を行う包括的な化学物質管理規則です。化学品だけでなくアークティクル（機器や成型品など）に含まれる化学物質にも適用されるもので、2007 年に発効して以降、段階的に施行されています。

コニカミノルタでは、この規則に対応すべく、化学品については予備登録物質の計画的登録を進めています。一方、アークティクルについては、定期的に追加される認可候補物質（高懸念物質）に対して含有調査（グリーン調達調査の中で実施）を行い、含有量が 0.1%を超えるものについては、適宜、対応を実施しています。

※ REACH 規則：化学品の登録・評価・認可および制限に関する規則

#### 製品含有物質の事前確認

RoHS 指令や REACH 規則など、各国の化学物質規制を順守するとともに、製品の環境安全性を担保するため、コニカミノルタでは機器製品などを対象とする禁止・監視物質基準、化学製品を対象とする禁止・制限物質基準、また製品安全性基準を社内基準として定めています。これらの基準のもと、開発段階から原料調達状況の確認や製品アセスメントを実施することで、製品の自然環境や人体への有害性を排除しています。

グリーンプロダクツ（製品への取り組み）

## 製品での生物多様性への対応

### 化学肥料による環境への影響管理に貢献する葉緑素計

コニカミノルタが開発した葉緑素計は、稲や麦、トウモロコシなどの農作物の葉緑素量を非破壊で簡単に測定できます。葉緑素量を定期的に測定することで、生育状況に応じた適量の施肥管理が可能になります。

このため、過剰施肥による土壌・地下水などへの生態系への影響を抑制でき、周辺の生物多様性に配慮した農業の実現に貢献します。



葉緑素計「SPAD-502Plus」



## 製品環境情報の提供

### 環境ラベル

コニカミノルタでは、環境ラベルによって製品に関する環境情報を積極的に開示しています。

#### Type I 環境ラベル

「Type I」環境ラベルとは、環境負荷の少ない製品であることを第三者の機関が認定する環境ラベルです。

##### ■ブルーエンジェルマーク

1978年、ドイツで導入された世界初の環境ラベルで、環境負荷の少ない製品・サービスを対象としています。コニカミノルタでは、1992年1月に複写機分野で世界初の認証を受けて以来、改訂ごとに基準をクリアして認証を取得しています。



##### ■国際エネルギースタープログラム

オフィス機器を対象とした省エネルギー制度で、基準を満たした製品が登録できます。日米両政府合意のもと1995年から実施されており、現在では、EU、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、台湾なども参加しています。



コニカミノルタのオフィス向けの情報機器製品は、ほぼすべてがその基準に適合しています。

##### ■エコマーク

財団法人日本環境協会によって1989年に制定された、日本の代表的な環境ラベルです。コニカミノルタは、オフィス向けの情報機器製品では基本的に取得する方針としています。



##### ■中国十輪マーク

1994年に中国政府によって導入された中国の環境ラベルプログラムです。コニカミノルタのオフィス向けの情報機器製品では積極的に取得を継続しています。



##### ■エコロゴ

1988年にカナダ政府によって設立された北米で最も権威のある環境基準・認証マークです。コニカミノルタは、2009年に新設されたオフィス機器分野において、複合機12機種について、他社に先駆けて複合機の認証を取得しています。



> [ニュースリリース：「Eco Logo」認証を初取得](#)

##### ■中国環境ラベル低炭素製品認証

2010年、中華人民共和国環境保護部は、複合機、プリンター、家庭用冷蔵庫、家庭用電気洗濯機の4分野を対象とした低炭素製品認証制度を新たに導入しました。コニカミノルタは独自の技術に基づく高い環境性能が評価され、モノクロ複合機「bizhub 164」などで同認証を取得しています。

> [ニュースリリース：中国で環境ラベル低炭素製品認証を取得](#)

## ■香港グリーンラベルスキーム

香港の民間非営利団体「香港環境促進会」が運営する環境基準・認証マークです。認定にあたっては、有害物質の削減はもとより、製品ライフサイクルを通じた環境負荷を考慮した厳しい基準が設けられています。コニカミノルタは、2011年3月、カラー複合機3機種について、複合機として初の認証を取得して以来、積極的に取得を継続しています。



> [ニュースリリース：複合機初の「香港グリーンラベルスキーム」認証を取得](#)

## ■タイグリーンラベル

タイ環境研究所（Thailand Environment Institute：TEI）が運営するタイグリーンラベルをプリンター（TGL-37-R1-12「Printer」）、複写機（TGL-27-R3-13「Photocopiers」）の分野で取得しています。



タイグリーンラベルは1993年に制度化され、1994年8月に開始したISO14024に基づくタイプI環境ラベル制度で、タイのグリーン公共調達制度でも取得が要請されています。

## Type II 環境ラベル

「Type II」環境ラベルとは、企業が独自の基準によって製品の環境性を検証・認定するものです。

### ■コニカミノルタ グリーンプロダクツ認定制度

コニカミノルタは、事業や製品特性に合わせた環境価値を創出し、お客様や社会での環境負荷低減に貢献することを目的として、優れた環境性能を持つ製品を評価・認定する独自の「グリーンプロダクツ認定制度」を2011年度から導入しています。



green products

この制度では、認定基準項目について、事業、製品特性ごとに設定した基準により、サステナブルプロダクツ（SP）、グリーンプロダクツ・プラス（GPplus）、グリーンプロダクツ（GP）の3段階で製品を認定します。

2015年度は新たに35機種の認定製品を創出し、累計で182機種を認定しています。

> [グリーンプロダクツ認定制度](#)

## Type III 環境ラベル

「Type III」環境ラベルとは、原材料の調達から生産、販売、使用、廃棄・リサイクルまで、製品ライフサイクル全体の環境負荷を定量的に把握し、公開する環境ラベルです。

### ■エコリーフ環境ラベル

コニカミノルタは、Type III 環境ラベルである「エコリーフ」が開始された2002年から、この環境ラベルによって情報機器製品の環境負荷データを開示しています。また、エコリーフには、環境負荷データを適切・有効に把握する仕組みを持つことを第三者機関が認定する「システム認定制度」があり、コニカミノルタは、複写機事業とプリンター事業で認定を取得しています。



> [エコリーフ環境ラベル](#)

## EPEAT (Electronic Product Environmental Assessment Tool)

米国の独立法人グリーン・エレクトロニクス・カウンシル (GEC) が認証の運営・登録を行っている、環境に配慮した製品の市場開発・販売促進を目的に設立された環境評価システムです。パソコンを対象に 2006 年から運用が開始され、2013 年には画像機器も対象に加わりました。有害物質の削減・禁止、省エネルギーなどだけでなく、回収サービスを含む、製品のライフサイクルについて全 59 基準で評価され、製品は「ゴールド」「シルバー」「ブロンズ」の 3 種類に分けて登録されます。



2016 年3 月時点、登録製品に占める「ゴールド」取得率は画像機器カテゴリでトップを維持しています。

2016年5月には、さらに認証範囲を広げ、オーストラリアでのEPEAT認証を取得しました。特にオーストラリアの画像機器カテゴリでは、コニカミノルタが初の「ゴールド」を取得しています。

> [EPEAT に関する情報 \(グローバルサイトへ\)](#)

## グリーン購入ネットワーク登録製品

コニカミノルタは、グリーン購入法やグリーン購入ネットワーク (GPN) ※のガイドラインに対応した製品を GPN のデータベース「エコ商品ねっと」に登録して、その情報を公開しています。

※ グリーン購入ネットワーク (GPN) : グリーン購入の取り組みを促進するために 1996 年 2 月に設立された企業・行政・消費者のネットワーク。

> [グリーン購入ネットワーク登録製品](#)

## グリーンプリンティング認証

日本印刷産業連合会が印刷業界の環境自主基準として運営している認定制度で、印刷工場に対する認定と印刷工場が購入する資機材に対する認定が行われています。コニカミノルタではグリーンプリンティング資機材のドライトナー型デジタル印刷機の分野で認定を受け、登録を行っています。

## グローバルオーガニックテキスタイル基準 (GOTS)

テキスタイル (繊維製品) においては、その繊維がオーガニックであることを認証する制度がかつては数多くありました。それらを統一し国際的な基準とするために国際作業部会が結成され、2005 年にグローバルオーガニックテキスタイル基準 (GOTS) が策定されました。GOTS では、繊維製品に使用するインクなどに対しても安全基準が設定されており、コニカミノルタではその基準を満たすインクとして 2014 年度に反応性染料インクの登録を申請、日本メーカーとして初めて登録されました。

## MSDS (Material Safety Data Sheet) 製品安全データシート/SDS(Safety Data Sheet) 安全データシート

化学製品を安全にお取り扱いいただくために、製品に含まれる物質やお取り扱い上の注意点などを記載した資料を作成、公開しています。MSDS は国際整合の観点から、SDS(Safety Data Sheet)とも呼ばれています。

> [MSDS\(SDS\)・AIS](#)

## AIS (Article Information Sheet) 製品環境安全情報シート

MSDS の対象外である印刷用製品などのアートを安全にお取り扱いいただくために、製品に含まれる物質やお取り扱い上の注意点などを記載した資料を作成、公開しています。

> [MSDS\(SDS\)・AIS](#)

# グリーンファクトリー認定制度

## 制度の概要

投入エネルギー・資源を最小限に抑え、コストダウンと環境負荷低減を実現する高効率な生産拠点の実現を目指しています。



コニカミノルタは、生産拠点の環境活動を総合的に評価する制度として、2010年から独自の「グリーンファクトリー認定制度」を運用しています。この制度は、事業ごとの生産戦略に沿った活動を展開することで、環境負荷低減とコストダウンを同時に進めることを目的としています。また、「地球温暖化防止」「循環型社会への対応」「化学物質リスクの低減」「生物多様性への対応」といった環境テーマに基づく目標達成に加えて、コニカミノルタのノウハウを結集した実施プロセスに関する約 250 項目のガイドラインの達成度も認定条件とし、活動の質的向上も図っています。

### グリーンファクトリー認定基準

テーマ	管理指標		レベル 1	レベル 2
地球温暖化防止	CO <sub>2</sub> 排出量（生産原単位 <sup>※1</sup> ）		12%削減 <sup>※6</sup>	20%削減 <sup>※6</sup>
循環型社会への対応	ゼロエミッション活動	外部排出物量 <sup>※2</sup> （売上高原単位 <sup>※3</sup> ）	30%削減 <sup>※6</sup>	50%削減 <sup>※6</sup>
		総排出物の最終処分率	0.5%以下	0.5%以下
	石油由来資源廃棄物量 <sup>※4</sup> （売上高原単位）		30%削減 <sup>※6</sup>	50%削減 <sup>※6</sup>
化学物質リスクの低減	VOC（揮発性有機化合物）の大気排出量		「中期環境計画」に基づく各拠点の 2011 年度目標の達成	「中期環境計画」に基づく各拠点の 2015 年度目標の達成
	土壌汚染リスク対応指針		—	対応指針に合致
生物多様性への対応	生物多様性対応指針 （水資源への配慮、排水への配慮、工場植栽の適正管理）		—	対応指針に合致
ガイドラインに沿った活動	実施項目の達成率 <sup>※5</sup>		70%以上	90%以上

※1 生産原単位：生産高あるいは生産量当たりの環境負荷量。事業ユニットごとに、CO<sub>2</sub> 排出に対する生産性が適切に評価できる方を選択

※2 外部排出物量：生産活動にともなって発生する総排出物量から内部リサイクル量と減量化量を引いた、コニカミノルタの拠点外に排出される量

※3 売上高原単位：売上高当たりの環境負荷量

※4 石油由来資源廃棄物量：外部排出物量のうち、石油由来の排出物量

※5 ガイドラインでは、実施項目ごとに「0点～3点」の4段階の評価基準と、達成目標となる「基準点」を設けている。

達成率とは、全項目に対する、基準点をクリアしている項目の割合を意味する

※6 基本的に2005年度を基準年とする。この数値を基本として、工場の特性に合わせた基準を個別に設定。ただし、事業再編などにより生産品目や生産状況が著しく変化した場合は、規定に従って変更することがある

> [生物多様性対応指針](#)

> [土壌汚染リスク対応指針](#)

## グリーンファクトリー活動の成果

### グリーンファクトリー達成拠点

すべての生産拠点でグリーンファクトリー認定「レベル2」を達成しました。

2015年度は、新たに4拠点（日本2、米国1、フランス1）がグリーンファクトリーレベル2を達成し、すべての生産拠点（18拠点）でレベル2を達成しました。

### グリーンファクトリーレベル2達成拠点

拠点	達成年度
コニカミノルタオプトプロダクト株式会社	2012年度
Konica Minolta Opto (Dalian) Co., Ltd.	2012年度
Konica Minolta Optical Products (Shanghai) Co., Ltd.	2012年度
コニカミノルタテクノプロダクト株式会社 狭山	2012年度
コニカミノルタテクノプロダクト株式会社 日野	2012年度
Konica Minolta Business Technologies (Wuxi) Co., Ltd.	2013年度
コニカミノルタオプトデバイス株式会社	2013年度
コニカミノルタ株式会社 オプティクカンパニーセンシング事業部（堺サイト）	2013年度
Konica Minolta Business Technologies (Dongguan) Co., Ltd	2014年度
コニカミノルタ電子株式会社	2014年度
コニカミノルタサプライズ関西株式会社	2014年度
豊橋精密工業株式会社	2014年度
コニカミノルタケミカル株式会社	2014年度
コニカミノルタ株式会社 インクジェット事業部	2014年度
Konica Minolta Supplies Manufacturing France S.A.S.	2015年度
株式会社コニカミノルタサプライズ	2015年度
Konica Minolta Supplies Manufacturing U.S.A., Inc.	2015年度
コニカミノルタ株式会社 機能材料事業本部	2015年度

※コニカミノルタ電子株式会社と豊橋精密工業株式会社は合併し、「コニカミノルタメカトロニクス株式会社」に改称しました（2016年4月1日）。

## グリーンファクトリー活動の効果

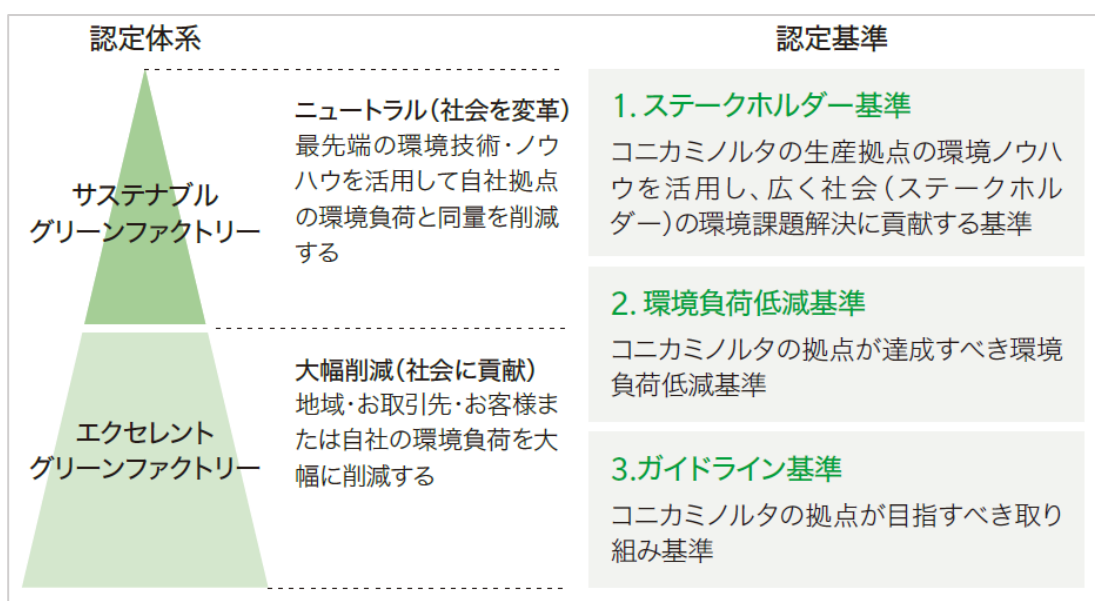
グリーンファクトリー活動により、生産性の向上に努め、コストダウンとともに、生産活動に起因する CO<sub>2</sub> 排出量の削減・廃棄物の削減を進めました。

2015 年度には、活動の成果として、下記の削減効果をあげました。

コストダウン	54 億円
CO <sub>2</sub> 削減効果	7.1 万トン
廃棄物削減効果	1.4 万トン

## エクセレントグリーンファクトリー認定制度

2016 年度からは「エクセレントグリーンファクトリー認定制度」を開始します。2018 年度に向けて、さらなる拠点の環境負荷削減とコストダウンを進めるとともに、お客様、お取引先および地域などステークホルダーとの連携を図った活動基準を設定しています。自社拠点の技術やノウハウを活用して、企業の枠を越えたより広い範囲の地球環境への貢献を進めていきます。



## 生産活動での省エネ・温暖化防止

### 生産拠点における省エネルギーの推進

コニカミノルタは、生産拠点の環境活動を総合的に評価する制度であるグリーンファクトリー認定制度に沿って、エネルギー生産性の向上に努め、さまざまな施策により、生産活動に起因するCO<sub>2</sub>排出量の削減を進めています。

#### 省エネサポートプログラム

コニカミノルタは、生産拠点でのCO<sub>2</sub>排出量削減を推進するため、「省エネサポートプログラム」を展開しています。同プログラムでは、グループ内の工場設計や生産設備設計、エネルギー管理の専門スタッフが生産拠点に赴き、エネルギー管理状況から、空調やボイラーなどのユーティリティ設備や生産設備の状況、設備システムの仕様までを検証し、それぞれの拠点に適した施策を提案します。また、この提案書を用いて専門スタッフと各拠点の担当者が省エネ効果をシミュレーションし、施策の実践に役立てています。



省エネサポートプログラム

#### 主な施策例

生産性向上	IE 作業分析、良品率向上、自動機導入、タクトタイム削減、生産スペース最適化
設備運転時間の最適化	非稼働時運転停止、待機電力削減
空調の運用見直し	設定温度の適正化、運転時間の適正化
照明の省エネ	照明の間引き、高効率照明への更新
成型機の省エネ	サーボモーター導入、シリンダー保温、赤外線加熱
圧縮空気の省エネ	インバーター化、台数制御、空気圧の最適化
冷凍機運用見直し	冷凍機の統合、出口温度設定の見直し
廃熱利用	排気/吸気での熱交換、除湿機の排熱利用による蒸気生産量の削減
放熱ロス削減	蒸気配管の保温、配管統合、バルブ漏れ低減



### 成型機や冷凍機など生産現場での省エネルギーを追求

#### (コニカミノルタビジネステクノロジーズ (東莞) 社)

中国、広東省の東莞市で複合機などの生産を行うコニカミノルタビジネステクノロジーズ (東莞) 社では、成形機の加熱方式の改善や冷凍機の温度設定の見直しにより、大幅な省エネを実現しています。

成形機については、「電気加熱式」から「赤外線加熱式」への改造により加熱効率が向上し、従来よりも短時間での加熱が可能となりました。あわせて加熱器の表面に保温層を設けることで、放熱ロスを抑えるとともに、室温の上昇を防ぐことで空調負荷の抑制にもつながりました。

冷凍機については、コニカミノルタの専門家による省エネ診断の結果を踏まえて、用途に応じた冷凍機の設定温度の見直しを実施。一般空調用冷凍機の設定温度を高めに変更することで、効率を高めて省エネにつなげました。



コニカミノルタビジネステクノロジーズ (東莞) 社

### 生産スペース縮小と生産時間短縮で省エネルギーを実現

#### (コニカミノルタビジネステクノロジーズ (無錫) 社)

中国江蘇省のコニカミノルタビジネステクノロジーズ (無錫) 社では、生産性の向上により環境負荷低減を目指す新しい試みとして、コニカミノルタが日本国内で培った専門的な分析ノウハウによる「インダストリアルエンジニアリング (IE) 作業分析」を導入しています。生産ラインの作業性や動線を徹底的に見直すことで、生産スペースの縮小と生産時間の短縮を実現するとともに、空調・照明を含めたエネルギー消費量を低減しました。



コニカミノルタビジネステクノロジーズ (無錫) 社

### 生産廃熱の有効利用と放熱ロス抑制により省エネルギーを徹底 ((株) コニカミノルタサプライズ)

山梨県甲府市に本社を置き、複写機用の現像剤、感光体ドラムの製造を行う (株) コニカミノルタサプライズ社では、トナー生産工程の廃熱の有効利用や蒸気配管からの放熱ロスの抑制により大幅な省エネを実現しています。

高温水の熱交換利用は一般的に行われていますが、(株) コニカミノルタサプライズではトナー生産工程で発生する低温水の廃熱も熱交換により積極的に有効利用し、別工程で使用する温水を生成することで、温水を生成するためのガスの削減に大きく貢献しています。

蒸気ロスの削減については、必要時のみ蒸気を供給するような自動制御システムを導入することで配管からの放熱を防ぎ、必要最適量の蒸気供給を追求しています。



(株)コニカミノルタサプライズ 甲府  
本社

## TOPIC | 環境に配慮した新研究棟 SKT

コニカミノルタ東京サイト八王子に 2014 年 4 月に開設した研究開発新棟 (SKT) は、屋上の太陽光発電パネル、自然光を大きく取り込むアトリウム (吹き抜け) や昼光センサーによる照明消費電力の削減、効果的な自然換気や井水利用など、環境負荷への継続的な貢献を果たす環境設備を整えており、環境配慮に優れた建物として、国土交通省が主導する建物の環境性能評価「CASBEE (キャスビー)」で最高の S ランクを取得しています。また、公益財団法人日本デザイン振興会が主催の 2014 年度グッドデザイン賞を受賞しています。



SKT のアトリウム (吹き抜け)

### 東京都環境確保条例トップレベル事業所

コニカミノルタ東京サイト日野は、2011 年から、東京都環境確保条例にもとづく「優良特定地球温暖化対策事業所」の「トップレベル事業所」として認定を受けています。「優良特定地球温暖化対策事業所」は、「地球温暖化の対策の推進の程度が特に優れた事業所」として東京都が認定するもので、その程度に応じて、「トップレベル事業所」と「準トップレベル事業所」の 2 つのレベルに分けられます。認定を受けた事業所は、東京都環境確保条例「大規模事業所に対する温室効果ガス排出総量削減義務」において、CO<sub>2</sub> 排出量の削減義務率が緩和されます。トップレベル事業所では、削減義務率が 2 分の 1 に緩和されています。

## 生産活動での省資源・リサイクル

### 生産拠点における省資源・リサイクルの推進

循環型社会の実現に向けて、さまざまな施策により、生産活動から生じる排出物の削減とリサイクルを進め、廃棄物の外部排出物量削減に努めています。

材料ロス削減	材料・部品・製品の良品率向上
包装材削減	簡易包装化、入れ目増量
包装材再利用	社内通い化、生産拠点間の通い化、部品サプライヤーとの通い化
成形端材削減	成形端材レスの金型導入、成形端材の極小化・内部リサイクル
プレス端材削減	送りピッチの極小化
補材ロス削減	洗浄用溶剤の再利用、成形機オイルの再利用
パレット再利用	部品サプライヤーとの通い化、部品用パレットサイズを変更し製品出荷に使用

### 取り組み事例

#### 樹脂端材の3Rにより排出物量を削減

生産拠点で、樹脂部品の成形工程で発生する端材の3R（Reduce・Reuse・Recycle（抑制・再使用・資源循環））に積極的に取り組んでいます。中国の情報機器生産会社コニカミノルタビジネステクノロジーズ（無錫）社や、コニカミノルタビジネステクノロジーズ（東莞）社では、端材を出さない成形金型を開発・導入し、原料となる樹脂の使用量を削減しています。

成形金型のホットランナー化、ランナーサイズの極小化、ランナー端材の粉砕・再利用により、投入する材料を削減し、その上で発生した不要な端材は、工場で使用する部品ラックや、サプライヤーからの部品輸送に使用する部品ボックスなどの材料として有効活用しています。

#### 梱包材の排出量の削減

生産拠点で、材料・部品調達の際に使用する梱包材の排出量削減に取り組んでいます。例えば部品ボックスをまとめるストレッチフィルムを再利用が可能な梱包用ベルトに変更するなどの包装の簡易化や、材料調達の際の購入単位を変更して入れ目増量を図ることによる梱包材の使用量自体の削減を行っています。また、部品ボックスを、段ボールから、樹脂部品の端材を再利用して成型された折り畳み式部品ボックスに変更し、繰り返しリユースしています。梱包用の緩衝材も、廃棄せずにサプライヤーに返却し再利用するなど、排出量の削減を図っています。

## 生産活動での化学物質リスク低減

### 基本的な考え方

予防原則の考えに基づき、化学物質リスクの低減に取り組んでいます。

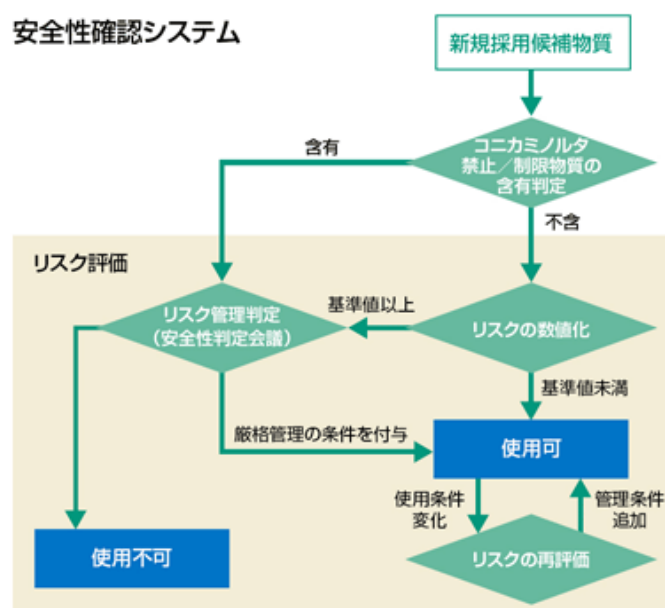
化学物質の生産や使用にあたって、人の健康への影響だけでなく、環境にもたらす悪影響を最小化する方法を取ることは、国際的な合意事項となっています。この認識のもと、各国で化学物質に関する法改正が進んでいます。コニカミノルタは、予防原則の考えに基づき、こうした国際的な潮流に先駆けて、化学物質リスクの事前評価の徹底、大気への有害物質排出削減、生産工程および製品からの有害物質の排除に取り組み、生産工程の作業員や製品使用者の安全管理向上を図っています。

### 化学物質リスクの事前評価

独自の安全性確認システムを活用し、化学物質の適正管理に努めています。

#### 安全性確認システムによる採用段階でのリスク評価

コニカミノルタは、製品化プロセスにおいて、新たに使用する化学物質に対して、採用候補の段階でリスクを評価する「安全性確認システム」を構築しています。これにより、製品安全、環境保全、労働安全の各側面において、合理的な化学物質リスク評価を実施し、適切な管理を行っています。



## 禁止／制限化学物質の制定

化学物質の採用前に行う、リスクの事前評価にあたって、受容できない危険・有害性を排除するために、コニカミノルタ独自の基準により、禁止／制限化学物質を定めています。この基準には、法的に規制されている化学物質だけではなく、専門機関に重篤な有害性を有すると認められている化学物質も含まれています。

## 化学物質のリスクポイント計算

コニカミノルタでは、安全性評価システムにおいて、独自の計算方法により、物質の危険・有害リスクをポイント計算しています。これは、「危険・有害性の種類と強さ」「安全対策のレベル」「使用量」の3つの係数から「危険・有害性ポイント」を数値化するものです。この数値を用いて、爆発などの危険性や、発ガン性などの健康影響などといった、種類の異なるリスクも共通の尺度で比較することができます。これにより、化学物質の危険・有害性の潜在的リスクを定量的に評価しています。

## 物質の使用状況を想定したリスク管理

リスクは暴露形態によって異なることから、より現実に即したリスク管理を行うために、「厳格な安全管理のもとで使用される場合（生産拠点など）」から「不特定多数の利用者が想定され、安全対策が期待できない場合」まで、使用状況を想定した4つのカテゴリーに分類し、それぞれのリスクに応じた安全要件を定めています。

やむを得ず有害性の高い化学物質を使用する場合は、安全性判定会議を開催して、調達、保管、取扱い、廃棄の観点からリスクを低く抑えられるよう管理条件を厳格に規定します。

## 継続使用時のリスク評価

コニカミノルタでは、事前評価を経て生産工程に導入された化学物質についても、定期的に使用量や使用条件の変化がないかどうかを確認し、変化がある場合はリスクを再評価し、適切な管理につなげています。

## 化学物質の削減・全廃

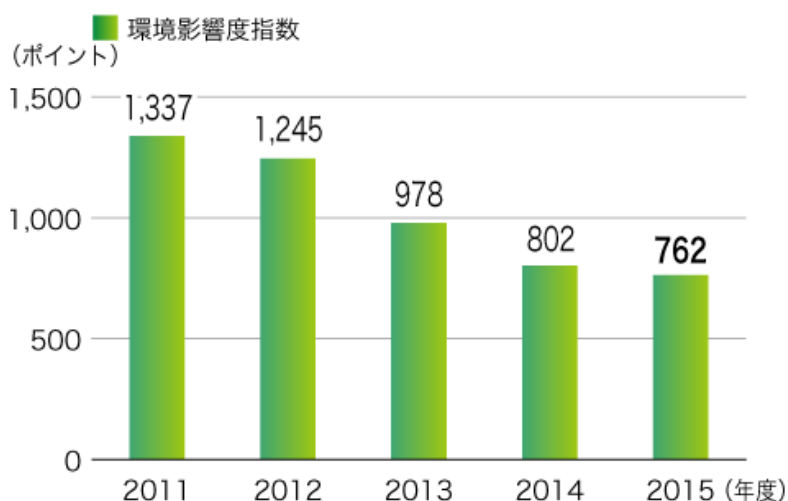
独自のリスク管理指標を定めて、VOC 削減に取り組んでいます。

化学物質の有害性と使用量からリスクを評価し、リスクが高いと判断したものの代替化や削減に取り組んでいます。大気排出の VOC（揮発性有機化合物）について、1993 年から世界各国の生産拠点で排出量削減に取り組んできました。特にリスクの高い VOC については、全廃対象物質を定めて全廃状態を維持しています。

### VOC 大気排出量削減

VOC については、管理指標として人体や環境への影響度と立地係数を掛け合わせた独自の「環境影響度指数」を設定し、計画的な削減を進めています。グリーンファクトリー認定制度に従い、拠点ごとに削減目標を設定して取り組んでいます。

VOC大気排出量（環境影響度指数）



> [環境データ算定基準](#)

### 環境影響度指数の算出方法

	有害性係数	物質例
ヒト健康影響リスクのある物質	×100	1,2-ジクロロエタン
生態系へのリスクのある物質	×10	ジクロロメタン、アクリル酸エチル、n-ヘプタン
大気汚染リスクのある物質		
間接的に環境影響のある物質	×1	イソプロピルアルコール、メタノール、エタノール、アセトン、酢酸エチル

※ 環境影響度指数：コニカミノルタ独自の指数。環境影響度指数(ポイント)=VOC 大気排出量 (t) ×有害性係数×立地係数

有害性係数：直接的または間接的な、人への健康影響および環境影響の重篤度により、1 倍、10 倍、100 倍で設定（神奈川県安全影響度評価における係数の考え方を参考に、コニカミノルタが独自に設定）

立地係数：工業団地外 5、工業団地内 1 で設定

## コニカミノルタの全廃達成物質

物質の有害性と使用量からとくにリスクが高いと判断した下記のVOC（揮発性有機化合物）を全廃対象物質とし、早くから計画的な取り組みました。その結果、2010年度中に全廃を達成し、以降もその全廃状態を維持継続しています。また、ジメチルホルムアミドについても、大気放出量ゼロを2004年度に達成し、以降もその状態を継続しています。



## 土壌、地下水汚染への取り組み

定期観測による汚染状況管理と、浄化促進および汚染拡大防止に努めています。

土壌や地下水の汚染が発見された拠点では、汚染物質が周辺に影響を及ぼすことがないように対策を実施し、定期観測による確実な管理を行っています。

汚染の浄化や拡大防止にあたっては、専門チームを編成し、その管理のもと、対策策定のための詳細調査の実施や汚染状況に適した浄化技術の検討を行い、取り組みを進めています。

なお、浄化の取り組み結果や観測結果の推移は、行政および近隣の皆様に定期的に報告し、確認いただいています。

> [土壌・地下水（汚染調査・対策実績）](#)

## 土壌汚染リスク対応指針の策定

生産拠点の環境活動を総合評価する独自の制度「グリーンファクトリー認定制度」の管理指標として、2011年4月に「土壌汚染リスク対応指針」を定め、同制度「レベル2」の認定基準として、この指針に合致することを求めています。

### 土壌汚染リスク対応指針

- ・履歴調査でリスクが高いと判断された生産拠点で、概要調査による土壌汚染リスク把握ができていていること
- ・土壌汚染（基準値超過）が確認された場合には、人への健康被害防止が図られていること
- ・敷地外への汚染流出防止が図られていること

## アスベストへの対応

国内各拠点および関係会社の建屋を対象として、吹付アスベストの使用状況を調査しています。2014年3月時点で、曝露による健康リスクは無いことを確認しています。今後もこの状態を維持管理するとともに、計画的に除去を進めていきます。

## PCB への対応（保管状況）

国内各サイトおよび関係会社で保管する PCB 廃棄物については、漏洩が生じないように適正に保管・管理するとともに、法令に従い行政に保管状況を報告しています。高濃度 PCB 廃棄物の処理については、JESCO※に委託して 2007 年度から処理を開始しています。今後も JESCO での受け入れ状況に合わせて、可能な限り早期に処理を進めます。低濃度 PCB 廃棄物についても、無害化処理の認定状況を踏まえて、2012 年度より順次処理を進めています。

※ JESCO：日本環境安全事業(株)

### PCB 廃棄物の保管状況（国内・2016年3月31日）

保管物名	単位	保管数 内、( )は低濃度 PCB
トランス類	台	3 (3)
コンデンサ類	台	6 (2)
蛍光灯安定器	台	1,954
その他機器	台	2 (2)
PCB 油	kg	150
PCB 汚染物	kg	80



## 生産活動での生物多様性への対応 （水資源・排水への配慮、工場植栽の適正管理）

### 生産拠点における生物多様性への配慮

生物多様性対応指針に沿って、取り組みを推進しています。

コニカミノルタは、生産拠点の環境活動を総合評価する独自の制度「グリーンファクトリー認定制度」の運用の一環として、生物多様性への対応に取り組んでいます。

2011年4月には、水資源や排水への配慮、工場植栽の適正管理についての方針をまとめた「生物多様性対応指針」を策定し、同制度「レベル2」の認定基準として、これら指針に合致することを求めています。

#### 生物多様性対応指針

##### <水資源への配慮>

- ・使用する水において総取水量の削減目標を設定し、削減施策を実施していること
- ・地下水を利用している場合には、地下水使用量の削減施策を実施していること

##### <排水への配慮>

- ・河川・湖沼における生態環境破壊を防止するために、異常排水時のリスク管理体制が構築できていること
- ・公共水域へ排出する排水が、水生生物の生息環境など生態系へ及ぼす影響を確認できていること

##### <工場植栽の適正管理>

- ・工場敷地内で、生態系に悪影響を及ぼす恐れが強い外来侵入種の植栽、種子の播種（はしゅ）を行っていないこと
- ・工場敷地内の植栽について、希少種などの存在が判明している場合には、管理・保護に努めていること

#### 水資源への配慮

コニカミノルタでは、各拠点で水使用量を把握・管理するとともに、総取水量の削減目標を設定して削減に努めています。

世界中のグループ生産拠点・研究開発拠点を対象として、水資源の使用に関する総合的なリスク評価を実施しています。WRI<sup>※1</sup>のAQUEDUCT<sup>※2</sup>を用いて分析した結果、非常に高いリスクを有する拠点は該当がありませんでした。また、2015年度は、AQUEDUCT評価を主要サプライヤーの一部へ拡大しました。その結果、非常に高いリスクを有するサプライヤーの拠点は該当がありませんでした。

比較的水リスクが高いと特定された中国の一部の生産拠点では、水使用量の削減目標を設定し、節水コマの設置や配管の漏れチェックと破損個所の修理といった活動に取り組んでいます。

今後も、拠点の新設や事業環境の変化などに応じて水リスク評価を継続し、必要に応じた水使用削減施策を

講じていきます。

また、主な取水源として地下水を使用している生産拠点では、地下水使用量が生産高に占める割合（原単位）を指標として削減目標を設定し、生産停止時の冷却水送水停止など、地下水の使用低減に取り組んでいます。

※1 WRI（World Resources Institute）：世界資源研究所

※2 AQUEDUCT：WRI が公表する最新の水リスクを示した世界地図・情報で、物理的な水ストレスや水資源に関する法規制リスクなど 12 種類の水リスク指標を基に作成されている

## 排水への配慮

コニカミノルタでは、排水による水質汚濁防止を目的として、排水に関する法律や条例、協定などの関連法規の順守状況を確認する順法監査を、グローバルで定期的実施しています。

生産工程で使用した排水を河川に排出している生産拠点を対象に、排水が生態系に与える影響を評価しています。評価に際しては、新しい排水管理手法として世界的に注目されているバイオアッセイ（生物応答）を利用した WET<sup>※</sup>評価を導入。国立環境研究所の協力のもと、水辺に生息する生物 3 種（藻類、甲殻類、魚類）を用いた試験を実施し、3 種の供試生物への影響（藻類：生長阻害、甲殻類：繁殖阻害、魚類：ふ化率およびふ化後の生存率低下）が認められないことを確認しています。

※ WET（Whole Effluent Toxicity）：個別の化学物質を評価するものではなく、排水そのものが水生生物へ影響を及ぼすかを評価する手法。従来の排水管理手法と異なり、未規制物質や複数の化学物質による生態系への複合的影響を総合的に管理できる。



## 工場植栽の適正管理

コニカミノルタでは、グループ生産拠点において、敷地内の植栽の適正管理を行っています。拠点ごとに植栽管理リストを作成して定期的にチェックすることで、新たに播種する種子も含めて、外来侵入種が含まれないことを確認しています。

また、敷地内で希少種が発見された場合には、立て看板や柵を設け、従業員や来訪者へ周知することで保護活動に努めています。例えば東京サイト日野では、絶滅危惧種のキンラン、カノコユリを管理・保護しています。



東京サイト日野のキンラン

## 調達における生物多様性への配慮

環境に配慮したコピー用紙を調達する基準を定めています。

日本の販売会社であるコニカミノルタジャパン（株）は、お客様に供給するコピー用紙について、森林破壊・劣化による動植物や住民の生活環境への影響に配慮して調達することを定めた「PPC 用紙購入基準」を策定し、2007 年から運用しています。

## 調達活動における環境負荷低減

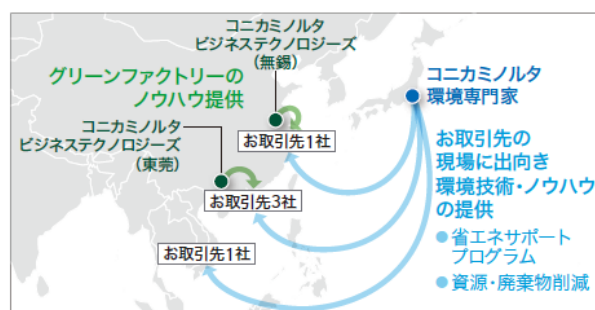
### グリーンサプライヤー活動

お取引先の工場を訪問し、お取引先のスタッフとともに改善に取り組む活動を行っています。

#### 活動実績

コニカミノルタがグリーンファクトリー活動で培ってきた環境技術・ノウハウを提供することで、省エネ・材料削減によるお取引先の環境負荷低減とコストダウンを同時に実現する「グリーンサプライヤー活動」を進めています。コニカミノルタの環境専門家が現地を訪問し、コストダウン効果や投資の必要性を含めたエネルギーや資源・廃棄物の改善提案を実施し、お取引先と協働で環境負荷低減活動を進めています。

2015年度には、3社で活動を開始するとともに、グリーンファクトリー基準と同じレベルの「グリーンサプライヤー活動目標」に対して、2014年度から活動を開始している2社において目標達成の目途をつけることができました。



#### お取引先の声 | 昌紅科技股份有限公司

「グリーンサプライヤー活動」ではコニカミノルタの専門家が我々の現場に入り込み、成形機やユーティリティの対策を一緒になって考えてくれました。対策の実施にあたってはコニカミノルタの中国生産拠点を訪問し、具体的な進め方を相談しながら取り組むことができました。

地方政府は省エネ活動を重視しており、グリーンサプライヤー活動の省エネ取り組み報告により、報奨金を授与されました。年間800トン削減できたことが成果であり、中国のCO<sub>2</sub>削減にも貢献できました。

昌紅科技股份有限公司

董事総経理

徐燕平様



コニカミノルタ拠点へ来社いただき活動内容を紹介

## グリーン調達

部品・部材などの調達にあたり、含有化学物質を評価して環境負荷の少ないものを優先的に購入する「グリーン調達」を実施しています。

### グリーン調達システム

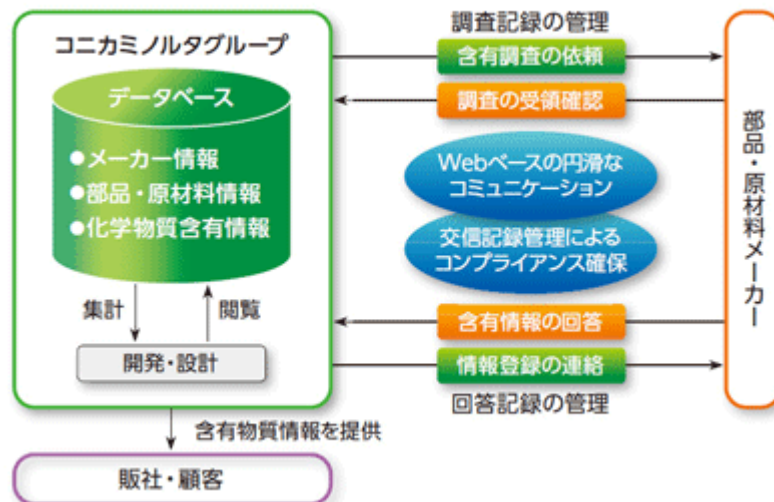
コニカミノルタでは化学物質法規制の強化に対応したグリーン調達システムを運用しています。

「グリーン調達システム SIGMA」の運用では、RoHS 指令への適合はもちろん、REACH 規則<sup>※</sup>の認可候補物質 (SVHC) や制限物質の追加など、含有化学物質規制の強化に迅速に対応させて含有物質の調査管理を行うとともに、規制および代替技術の動向を注視しつつ、有害物質の排除計画を策定し、確実なリスク回避につなげています。

また、お取引先の調査負担をできるだけ軽減するため、調査対象物質は IEC(国際電気標準会議)の国際規格 (IEC62474)を取り入れています。また、お取引先に対しては、環境法規の動向に関する説明会を定期的開催し、コニカミノルタの取り組みに理解をいただいています。

※REACH 規則：EU が従来の化学物質関連の規制を統合して、2007 年 6 月に施行した、化学物質の登録、評価、認可、制限に関する規則

#### 「グリーン調達システム SIGMA」の概要



#### 主な特徴

- ・日・英・中の三カ国語対応
  - ・化学物質調査の2つの標準方式 (JAMP<sup>※1</sup>、JGPSSI<sup>※2</sup>) や独自形式に対応
  - ・禁止物質の不含有確認と監視物質の含有情報収集を分離
  - ・お取引先と調査・回答の状況を共有化
  - ・交信記録をDB管理し、追跡可能にすることでコンプライアンスを確保
  - ・法規制、対象物質変更への容易な対応
- ※1JAMP：アーティクルマネジメント推進協議会が策定・運用する化学物質調査標準  
※2JGPSSI：グリーン調達調査共通化協議会が策定・運用する化学物質調査標準

> [グリーン調達ガイドライン \(日、英、中\)](#)

## ■ 環境コラボレーション

情報機器事業では、お取引先の環境管理の強化のために、お取引先の現場診断・教育支援を通じて強力なパートナーシップを構築する「環境コラボレーション」を実施しています。

これはお取引先の環境管理の自立を支援する活動です。コニカミノルタの従業員がお取引先の工場に直接出向き、化学物質管理の診断とその結果に応じた指導や、測定結果・材料情報などの文書管理の指導を行います。

また、毎年、お取引先の従業員を教育し、合格者をサプライヤー内部診断員として認定しています。加えて、毎年、新規の担当者を対象に集合教育を行うとともに、従来からの内部診断員には文書によるフォローアップ教育も行っています。

## お客様が抱える環境課題解決の支援

### 活動の概要

コニカミノルタは、お客様それぞれに最適なソリューションを提供するため、きめ細かなコミュニケーションによって課題の共有に努めてきました。こうした取り組みを環境面にも展開し、コニカミノルタの環境経営の考え方や効果的な実践事例をお客様にもオープンにし、お客様の環境活動を支援するグリーンマーケティング活動を進めています。お客様とともに環境活動をレベルアップすることで、一社だけではなし得ない大きな環境価値を生み出す試みです。お客様の課題の解決を提案し、コニカミノルタを信頼していただくことで、複合機の商談や販売に繋がった事例も出てきました。まさに当社の成長とお客様の成長の両方に貢献するCSV（Creating Shared Value=共有価値の創造）そのものだと考えています。

### 活動の実績

2015年度は、環境セミナーや講演、工場見学を計12回実施し、累計350社、500名以上のお客様に参加いただきました。多くのお客様から「非常に役に立った」「もう少し詳しく聞かせてほしい」といった感想や要望をいただき、100社以上のお客様へのご訪問、意見交換を行いました。また一部のお客様には生産拠点の省エネレベルを診断し解決策を提案する「省エネサポートプログラム」も実施しました。意見交換などを通じて、お客様の環境活動の中でコニカミノルタがこれまで着手してこなかった取り組み、ノウハウを提供し合うことでお互いの環境活動が磨き上げられるという好循環も生まれています。

#### お客様の声 | 自動車部品・工作機器メーカー、株式会社ジェイテクト様

ジェイテクトはグループの長期ビジョンで高いCO<sub>2</sub>削減目標を設定したものの、工場での省エネ施策は出尽くしており活動が進んでいませんでした。第三者の目での評価は良い取り組みであるとの経営層からの言葉を受け、コニカミノルタに省エネ診断を依頼させていただきました。

コストダウンとCO<sub>2</sub>削減効果が見える化し、投資回収から優先順位をつけ、実行計画を立てる考え方は非常に参考になりました。省エネ診断をきっかけに各工場の省エネ活動を活性化することができました。管理部門と現場が一体となった活動により達成感を共有することが、さらなる改善に向けて重要であることを実感しました。業界は違いますがそれぞれの技術、ノウハウを共有することでより大きな環境貢献ができると思います。今後も環境活動を通して築いた深い信頼関係を大切にしたいと思います。

株式会社ジェイテクト 環境管理部長  
伊藤 清則 様



コニカミノルタ拠点へ来社いただき  
活動内容を紹介



お客様の工場にて省エネ診断結果  
を共有・議論

### お客様の声 | 中国のテキスタイル企業、上海华卉丝绸印染有限公司様

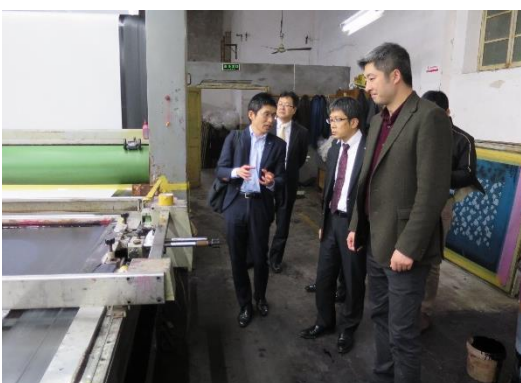
中国の環境規制は年々厳しくなっています。当社が属する染色業界ではエネルギーや水を大量に使うことから、とくに省エネルギーや水削減といった要請があります。エネルギーや環境対策の専門家もおらず、行政からの要請に対してどのように対応していくのか、頭を悩ませていました。

そんな折、インクジェットテキスタイルプリンターでお付き合いのあるコニカミノルタから、日本の環境部門のメンバーが中国に来るのでお役に立てるのでは、と声を掛けていただきました。何度も足を運んで、エネルギーや水の状況を親身になって検討し、対策を提案してくれました。提案いただいた施策のいくつかは当社の方で実行しています。当社が抱える環境課題に対して、インクジェットテキスタイルプリンターの提供だけでなく、周辺部分を含めて支援してくれて本当に助かっています。今後もコニカミノルタとは信頼関係に基づいた長いお付き合いをお願いしたいと思っています。

上海华卉丝绸印染有限公司

董事長

陈云代様



お客様の工場での環境対策検討

## お客様の環境課題を解決するサービスの提供

### お客様の出力環境の最適化による環境負荷低減支援

出力環境の最適化により、オフィスにおける業務効率化と環境負荷低減に貢献します。

コニカミノルタが提供する出力環境最適化サービス「OPS (Optimized Print Services)」は、プリンターや複合機などの出力機器の運用を一括受託し、最適配置や稼働率の向上などを実現するソリューションです。コニカミノルタは OPS のグローバル展開を進めており、これまでにグローバル契約を締結された企業は全世界にわたり、その業種も保険・金融サービス、国際輸送サービス、産業機器・家電メーカーなど、多岐にわたっています。

OPS による出力環境の最適化は、お客様のオフィスにおける業務効率化やコスト削減だけでなく、環境負荷低減にも貢献しています。例えば、複数の出力機器を複合機に集約したり、省エネ効果の高い最新モデルに更新したりすることで、消費電力を大幅に削減できます。また、出力状況を継続監視して無駄なプリントを削減したり、文書を電子化したりすることで、収納スペースの削減や、紙資源の消費削減にもつながります。

#### OPS を通じた環境負荷低減支援の事例

英国の販売会社コニカミノルタビジネスソリューションズ (UK) 社では、2012 年から現地の大学に OPS を提供し、オンラインで閲覧可能なものは出力しないなど、学内での書類の作成業務を一から見直した結果、年間 1 千万枚あった印刷用紙の使用量を、2 年後には 350 万枚まで削減しました。学内に設けていた印刷施設の廃止にもつながり、コスト削減効果も大きなものでありました。

また、フランスの販売会社コニカミノルタビジネスソリューションズ (フランス) 社でも、幅広い産業分野のお客様に OPS を提供しています。例えば、貨物管理のために多くの書類を要する海運企業に対しては、複合機による紙の使用量やエネルギーの消費状況などを調査した上で、使い方の無駄などを指摘し、3 年間で CO<sub>2</sub> 排出量を 10%削減する改善案を提案しました。また、環境対策が工場のみを終始しがちなアパレル企業に対しては、OPS の提案とともに、従業員の環境意識を高めるポスターを提案するなど、オフィス含めた全社的な対応を促進させました。

### オフィス改革による環境負荷低減支援

自らのオフィスでの実践を通じて、ソリューション提案力をさらに強化しています。

コニカミノルタでは、オフィス環境を最適化することで、環境負荷の低減に加えてワークスタイル変革にも寄与する、オフィスソリューションサービスを提供しています。その効果を自ら実証するとともに、実践によって提案力を強化するため、コニカミノルタジャパン(株)のオフィス移転を機に、新オフィスにさまざまな施策を導入しました。

具体的には、複合機の最適配置をはじめ、文書の電子化による印刷量や書類保管スペースの削減、TV 会議の



導入による出張・移動の削減、クラウド環境を駆使した情報管理の高度化など、さまざまなオフィスソリューションを実践。これらの結果、コピー紙出力量を 24%削減、使用電力量を 44%削減、CO<sub>2</sub> 排出量を 44%削減するなど、環境負荷とコストの低減に大きな効果があり、オフィス内の有効スペースも 200m<sup>2</sup> 以上確保できました。これに加えて、ワークスタイルの改善により、従業員同士のコミュニケーションを活性化させ、的確な意思疎通のできる、生産性の高いオフィス環境を実現できました。なお、この新オフィスはライブシヨールームとしてお客様にも体感いただいています。



> [「働き方変革」自社実践の取り組み](#)

## ■ オフィスでの環境負荷削減を訴求する IT ソリューション展示会開催

フランスの販売会社コニカミノルタビジネスソリューションズ(フランス)社では、毎年、イノベーションにより環境性に優れたオフィス環境やビジネススタイルを幅広く訴求する展示会「Eco Buro」を開催しています。コニカミノルタのビジネスパートナーである多くの IT 企業とともに、大企業から SOHO まで幅広いお客様を対象に、ビジネスオフィスでの環境性向上に役立つさまざまなソリューションをご紹介します、お客様とともに環境負荷を削減することを目指しています。

## ■ エコカリキュレーター

コニカミノルタジャパン株式会社がウェブサイト上で提供する「エコカリキュレーター」では、コニカミノルタの複合機 bizhub (ビズハブ) シリーズの年間消費電力算出ができ、使用機種を置き換えた場合のエネルギーコストと CO<sub>2</sub> 排出の削減量のシミュレーションを行うことができます。

> [エコカリキュレーター](#)

## POD (Print On Demand) サービスによる環境負荷削減への貢献

お客様の印刷業務を請け負うことで、コスト削減や省エネルギーに貢献します。

キンコーズジャパン株式会社が提供する POD サービスは、お客様のご要望に応じて短期間で印刷するサービスです。例えば、お客様の業務繁忙期に本サービスを利用いただくことで、ピーク時の印刷量に見合う台数のプリント機器をお客様自身で常備する必要がなくなります。これにより、お客様の機器導入・維持に掛かるコストが抑えられるとともに、社会全体の資源・エネルギーの節約にもつながります。



## カーボン・オフセット

社会全体として CO<sub>2</sub> 排出量の削減を図るカーボン・オフセットの取り組みを実施しています。

地球温暖化の防止は、世界規模での対応が求められている大きな環境課題のひとつです。コニカミノルタでは、長期環境ビジョン「エコビジョン 2050」を掲げ、環境問題に全社一丸となって取り組み、CO<sub>2</sub> (二酸化炭素) をはじめとする温室効果ガスの排出削減活動を積極的に行っていますが、その歩みをさらに前進させるため、カーボン・オフセットへの取り組みを進めています。

カーボン・オフセットとは、企業の事業活動で排出する CO<sub>2</sub> 等の温室効果ガスの排出のうち、どうしても削減できない量の全部又は一部を、他の場所での排出削減・吸収量でオフセット(埋め合わせ)するという地球温暖化対策の一つの手法です。カーボン・オフセットの仕組みを活用した商品・サービス・イベント等は年々増えており、市民・企業・自治体等が主体的に地球温暖化対策に貢献する手段の一つとして注目されています。

### プロダクションプリントでのカーボン・オフセット

コニカミノルタでは、2014年10月から販売するプロダクションプリント機(以下、PP機<sup>※1</sup>)において、調達段階から使用段階まで、製品ライフサイクルの各段階で発生する CO<sub>2</sub> 排出量を排出権クレジット使用により相殺(排出権で埋合せ)するカーボン・オフセット<sup>※2</sup>を導入しています。省エネ性の高い当社の PP 機をご使用頂くことで、製品使用時の CO<sub>2</sub> 排出を削減できますが、本取り組みではこれに加えて、どうしてもゼロにできない残りの CO<sub>2</sub> 排出をサプライチェーン全体で相殺し、実質カーボンニュートラルな製品を提供しています。

これらの取り組みは、日本、豪州が先行して行いましたが欧州では 2015 年 6 月よりプロダクションプリント機器に加え、オフィスプリント機器も対象にした「enabling carbon neutrality」(エナブリング カーボン ニュートラルティ)のサービス名で、欧州全域でカーボン・オフセットサービスを開始しており、更なる持続可能な地球・社会の実現に貢献しています。



※1 bizhub PRESS C1100、C1085、C1070、C70hc、C1060、C1060L、2250P、1250、1250P、1052 & bizhub Pro951

※2 製品使用時のCO<sub>2</sub>排出量は、国際エナジースターのTEC値に基づく、当該製品の導入から5年間の平均使用条件での推定値を利用。機器の調達材料、生産、物流及び印刷時の電力使用に関わるCO<sub>2</sub>排出量をオフセットしており、廃棄、回収リサイクル、紙及びトナーは含まれません。

> [日本国内でのプロダクションプリントのカーボン・ニュートラルサービス](#)

## コニカミノルタのカーボン・オフセット実績

	施設名	排出権	カーボン・オフセット実施期間	カーボン・オフセットする温室効果ガス排出源	カーボン・オフセット数量
	プロダクションプリント機	CER (中国遼寧省・炭鉱メタン回収・エネルギー有効利用プロジェクト)	2014年10月～2016年12月	プロダクションプリント機の調達、生産、物流、使用(印刷)に係るCO <sub>2</sub> 排出量	オフセット実施期間中 69,278t-CO <sub>2</sub>

## 販売活動での環境負荷低減

### 販売活動にともなう CO<sub>2</sub> 排出量の削減

#### 営業車両へのエコカーの導入と、エコドライブの推進

コニカミノルタは、世界各国の販売会社で営業車両利用にともなう CO<sub>2</sub> 排出量を管理し、その抑制に努めています。販売・サービス活動の効率化による移動量の削減や、CO<sub>2</sub> 排出の少ないエコカーの導入、エネルギー消費を抑えるエコドライブなどの施策を推進しています。

#### 日本の販社でのエコドライブの取り組み

コニカミノルタジャパン株式会社では、全社有車に「車両運行管理システム」を導入しています。本システムは、車両の運行状況に関する情報（急加速、急減速時の速度や運転時間、燃費など）を常時収集し、蓄積するものです。これらのデータを、例えば長時間アイドリングの抑制などに利用し、燃料消費をできるだけ抑えるエコドライブの取り組みを推進し、車両による環境負荷低減を図っています。

### 再生可能エネルギーの導入

#### 太陽光発電の取り組み

ベルギーと米国の販売会社では、再生可能エネルギーを導入しています。コニカミノルタビジネスソリューションズ（ベルギー）社では、2010 年から、社屋に設置した太陽光発電設備で発電を行い、オフィスやショールームの電力として再生可能エネルギーを利用しています。また、コニカミノルタビジネスソリューションズ（USA）社では、2013 年から、本社駐車場に太陽光発電設備を設置し、オフィスの電力として再生可能エネルギーを利用しています。また、2014 年 4 月に開設した研究開発新棟（SKT）の屋上にも太陽光発電パネルを設置しています。

2015 年度の再生可能エネルギー発電量は、合計で 1,147,486 kWh でした。

コニカミノルタでは、事業の成長と社会課題解決を両立させる CSV（Creating Shared Value）の実践をコンセプトとして環境経営に取り組んでおり、再生可能エネルギーを、CO<sub>2</sub> 排出削減と事業成長を両立できる 1 つの手段と考えています。2016 年度までに、年間発電量を 1,000MWh（2013 年度比で約 2.5 倍）以上とする計画です。



社屋に設置した太陽光発電設備（ベルギー）



駐車場に設置した太陽光発電設備（米国）

## 環境貢献活動と社員の環境意識向上への取り組み

### 従業員の環境意識を向上する「サステナブルデー」の開催

フランスの販売会社コニカミノルタビジネスソリューションズ（フランス）社では、従業員の CSR に対する認識の向上を図るために、エコフレンドリーな取り組みや、慈善団体への参加を促す「サステナブルデー」を開催しています。このイベントでは、環境ポリシーに関する教育、自社で採取した蜂蜜の販売、エコカー（電気自動車）の活用、廃棄物の適切な処理など、環境に関するさまざまな取り組みに触れることができ、持続可能性社会の実現に向けて従業員一人ひとりが意識を醸成する機会となっています。

### 生物多様性への意識向上に向けて養蜂を実施

コニカミノルタビジネスソリューションズ（フランス）社では、パリにある会社のビル屋上を緑化し、ミツバチの巣箱を設置して養蜂を行っています。フランスにはミツバチを大切にする伝統があり、人口密度の高い都会で養蜂することにも理解があります。周辺地域のさまざまな果樹、野菜、花などの植物の受粉に、この巣箱で育ったミツバチが役立っています。また、採取した蜂蜜を瓶詰にして従業員向けに販売し、得られた売り上げをチャリティ基金に寄付する取り組みを通じて、従業員の生物多様性保全意識の向上と、地域社会への貢献を図っています。

### エチオピアの森林再生を目的とする「グリーンマラソン」を支援

コニカミノルタビジネスソリューションズ（フランス）社は、2011 年以來エチオピアの森林再生を目的としてフランスのブルターニュで開催されている「グリーンマラソン」の趣旨に賛同し、大会の発足時から支援を続けています。

このマラソン大会では、スポーツの精神や自然環境保護といったさまざまな観点から社会貢献を考え、毎年 1400km<sup>2</sup>の森林が失われているエチオピアの森林の再生をサポートするために、参加者ののべ走行距離 1 キロごとに 1 本の木を植林するという取り組みを行っています。

## 物流での CO<sub>2</sub> 削減

物流にともなう CO<sub>2</sub> 排出量を削減するには、輸送の効率化や環境負荷の少ない輸送手段を選ぶ必要があります。コニカミノルタでは、ワールドワイドで物流拠点・ルート最適化による輸送距離の短縮、積載効率の向上によるコンテナ数の削減、航空機輸送頻度の低減を進めることで、物流活動に起因する CO<sub>2</sub> 排出量の削減を進めています。

### 主な取り組み

#### 需要予測精度の向上による航空輸送の削減

同じ重量の荷物を同じ距離だけ輸送するのに、航空機は船舶に比べて 57 倍もの CO<sub>2</sub> を排出します（GHG プロトコル公表値による）。

情報機器製品の国際間輸送にあたっては、通常は船舶を使用していますが、やむを得ず航空機を使用すると、CO<sub>2</sub> 排出量が増加します。そこで、需要予測の高精度化や在庫管理システムの向上により、航空機使用の頻度低減に取り組んでいます。

2015 年度も引き続き、品質問題発生の極小化、開発日程の順守や需要予測の向上による、航空機輸送の削減に取り組みました。加えて、供給管理の最適化などのサプライチェーンマネジメント施策に取り組みました。

#### 輸送コンテナ積載の効率化（最適化）

欧州では、ドイツを拠点として欧州各国に向けた情報機器製品の配送を行っています。この配送には主にコンテナを使用していますが、製品の大きさや形状はさまざまで日々数量も変化するため、コンテナへの積載効率の向上が課題の一つです。そこで、積載シミュレーションプログラムを導入することで積載効率向上を図り、輸送時の CO<sub>2</sub> 排出量を削減しています。

#### モーダルシフト（輸送手段の変更）の推進

コニカミノルタは、製品やパーツの長距離輸送手段を、航空機やトラックから、船舶や鉄道など CO<sub>2</sub> 排出量の少ないものに切り替えるモーダルシフトを進めています。

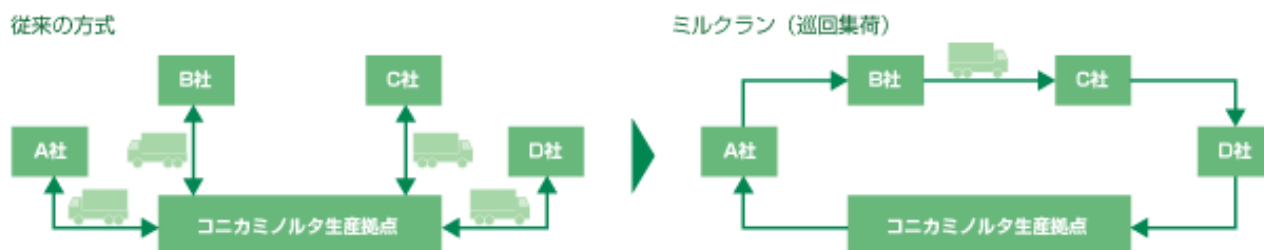
例えば欧州では、オランダ・ロッテルダム港からドイツ・エメリッヒの拠点倉庫への輸送手段として、ライン河を航行するバージ船を使用しています。また米国では、西海岸にあるロスアンゼルス港から内陸部、東海岸に貨物を輸送する際、鉄道を利用することで CO<sub>2</sub> 排出量の削減を図っています。

#### 物流ルートの見直し・物流拠点の集約

ワールドワイドで物流拠点の再編を進めることで、物流活動に起因する CO<sub>2</sub> 排出量の削減を進めています。2015 年度は、中国の製造拠点からワールドワイドに出荷している情報機器の製品とサービス用部品の物流について、製造拠点などの制約から両者別々に取り扱っていた物流を一緒にすることで、物流の効率化を図りました。

## ミルクラン（巡回集荷）

ミルクランとは、牛乳業者が複数の牧場を回って牛乳を集めることに由来する名称で、製造業では、各部品メーカーから個別に納品を受けるのではなく、複数のメーカーを巡回して集荷する輸送方式を指します。コニカミノルタでは、情報機器の部品メーカーが集中する中国・江蘇省の無錫市近郊でミルクランを採用しています。これにより、トラックの走行距離が相対的に減少し、CO<sub>2</sub>排出量の削減につながります。また、部品をダンボールでなく専用の通い箱に入れて輸送することで、廃棄物の削減にも寄与しています。



## 共同輸送

エプソン販売株式会社と、関東・甲信越エリアにて、設置作業を含めたビジネス市場向け商品の共同配送を行っています。この取り組みにより、高品質な納品・設置作業でお客様の満足度向上につなげるとともにCO<sub>2</sub>排出量削減にも貢献しています。

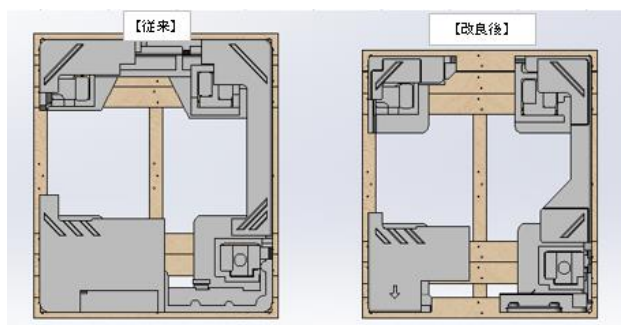
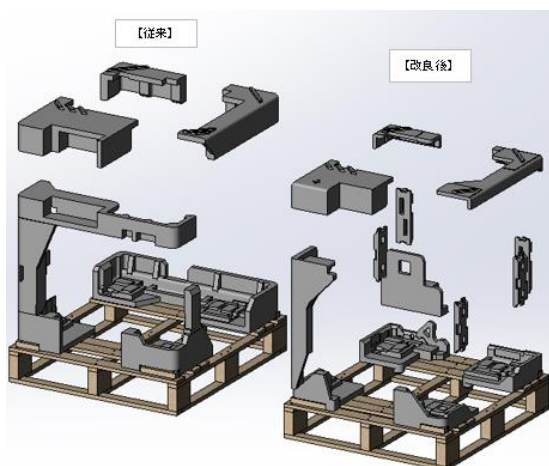
## 包装材料の使用量削減

包装材の形状改良や、生産拠点間で使用する包装箱のリユース・包装材のリサイクルを進めています。

### 主な取り組み

#### 包装材料・梱包資材の削減

情報機器の主要製品であるオフィス向け複合機やプロダクションプリント機の緩衝材を最適化することで梱包資材の削減を行いました。中国の製造拠点にて製品に加速度測定機を取り付け、ワールドワイドの販売会社に向けて船、トラック、鉄道などさまざまなルートで配送し、製造から開梱までに受ける種々の衝撃値を測定しました。得られた衝撃値を基に緩衝材の配置と形状を最適化することで衝撃を分散させ、従来形態と同等以上の耐衝撃性を保持したまま緩衝材の薄型化を実現し、梱包材料の使用量を削減しました。その結果、梱包箱も小型となり輸送効率の向上による物流時のCO<sub>2</sub>排出量の削減にも寄与しました。



#### 使用済み包装材のリサイクル

販売会社でも使用済み包装材のリサイクルを進めています。英国の販売会社コニカミノルタビジネスソリューションズ(UK)社では、物流倉庫内にリサイクルセンター「グリーンハブ」を設置し、複合機の使用済み包装材を段ボール、発泡スチロール、フィルムに分別し、破碎・圧縮したうえで、地元のリサイクル業者に売却しています。重量の割に体積が大きく輸送効率の低い発泡スチロールは、「グリーンハブ」内で粉碎圧縮し、その輸送にともなう環境負荷低減を図っています。同様の取り組みを、中国、フランス、ベルギー、ドイツ、日本でも進めています。



発泡スチロール粉碎機



## 製品リサイクルの取り組み

### 情報機器の再資源化の取り組み

世界の各地域で使用済み製品の再資源化の体制を構築し、情報機器本体および消耗品を対象に、再資源化率の向上をめざし取り組みを継続しています。

#### 2015 年度の日本における機器回収実績

- 推定回収率 = 67%
- 再資源化率 = 99% (重量比)

### 使用済み製品のリサイクルを推進

日本国内では、使用済みの複合機を全国の販売会社を通じて回収しています。回収された複合機の解体・分別は、全国各地の協力会社に委託しています。

協力会社では、回収した製品を機械破碎ではなく手作業で解体することで、リサイクル率の高い処理を実現しています。

解体後の部品は、金属やプラスチックなどに分別され、原料として再利用可能な素材、あるいは燃料として、それぞれを処理できる業者に送られリサイクルされます。



協力会社での作業の様子

### レーザープリンターカートリッジの回収・リサイクル

コニカミノルタでは、レーザープリンターの使用済みトナーカートリッジの無償返却リサイクル制度「Clean Planet Program」を、日本、欧州 18 カ国および米国で展開。米国では複合機の使用済みトナーボトルにも対象を拡大しています。

- > [日本の使用済みカートリッジ回収プログラムへ](#)
- > [米国の Clean Planet Program へ](#)
- > [欧州の Clean Planet Program へ](#)



Clean Planet Program サイト(欧州)

### 使用済み複合機・プリンターなどの回収・リサイクル

コニカミノルタは、世界各国の法規制や市場の状況に合わせて、使用済み製品の回収・リサイクルのシステムを地域ごとに構築しています。

日本では、「産業廃棄物の広域的処理に係る特例制度（広域認定制度）」に基づき、国内において販売した複写機・複合機、プリンターを回収する認可を環境省から受けています。

回収にあたっては「使用済みレーザープリンター・複写機回収プログラム」を運用し、法人のお客様にて使用済みとなったプリンターや複写機を有償で回収・再資源化しています。なお、一般廃棄物に該当する個人のお客様の使用済み機器は、プログラムの対象外となります。

海外でも、各国の市場の状況に合わせて活動を進めており、欧州では、電子・電気機器の廃棄に関する EU 指令（WEEE）に準拠した対応を実施しています。

- > [日本の「使用済みレーザープリンター・複写機回収プログラム」\(有償\) へ](#)

## 地域・社会とのコミュニケーション

### 展示会・展示施設への出展

#### 環境展示会エコプロダクツ展

東京ビッグサイトで毎年12月に開催される日本最大の環境展示会「エコプロダクツ展」に、1999年から継続して参加しています。

同展示会では、コニカミノルタの環境方針、環境への取り組み、環境配慮型製品の展など、全社一丸となって実施している環境負荷低減に向けたさまざまな取り組みをご紹介します。



出展ブース



> [環境展示会エコプロダクツ展](#)

#### おおさか ATC グリーンエコプラザ

コニカミノルタは、関西における環境情報発信基地であり、環境を楽しんで学べる施設「おおさか ATC グリーンエコプラザ」に常設ブースを設置して、未来をみつめた地球環境問題への取り組みについてご紹介しています。



「おおさか ATC グリーンエコプラザ」  
常設ブース

> [おおさか ATC グリーンエコプラザ](#)

## 地域社会との対話

### 神戸サイト コ・ジェネレーションシステム設置計画に係る地域コミュニケーション

コニカミノルタは、兵庫県の神戸サイトにおけるコ・ジェネレーションシステムの設置計画に関し、環境影響評価事前配慮書を地域自治体に提出するとともに、ステークホルダーの皆様に公開し、説明会を開催し、皆様のご意見を伺いました。

#### 【設置計画】

名称	神戸サイト コ・ジェネレーションシステム設置計画
設置予定地	兵庫県神戸市西区高塚台 1-5-3
運転開始予定	2016 年度中

## 環境社会貢献活動

### エチオピアの植樹支援のマラソン大会を後援

フランス



フランスのレンヌで開催される「グリーンマラソン」では、走行距離に応じて、アフリカのエチオピアで植樹を行うプロジェクトを実施し、毎年 1,400km<sup>2</sup>の森林が失われているエチオピアの緑化に貢献しています。コニカミノルタビジネスソリューションズ(フランス)社は、2011 年度から大会への支援を始め、2013 年度からはタイトルスポンサーとして協力しています。

### 子どもたちを対象とした環境教育を実施

香港



コニカミノルタビジネスソリューションズ(香港)社は、2012 年度から、地元の環境 NGO 団体「グリーンセンス」と共同で、子どもたちを対象にした環境教育「エメラルド学習プログラム」を実施しています。これまでに、使用済み油から石けんを作るワークショップ、太陽エネルギーの実験、稀少生物を観察するエコツアーなどさまざまな体験メニューを提供しました。

### 「タンチョウチャリティ企画」協賛

日本



日本のタンチョウ<sup>※</sup>は、生息環境の悪化によりその数が激減し、一時は絶滅の危機に瀕していました。しかし、1987 年に日本野鳥の会が「鶴居・伊藤タンチョウサンクチュアリ(保護区)」を設立して、地域住民や関係団体とともに保護活動を行ってきた結果、現在では 1,000 羽を超えるまでに増加しました。コニカミノルタはサンクチュアリ設立以来、保護活動の支援を続けています。

※ タンチョウは、全身白色で頭頂部が赤い大形の鶴で、ユーラシア東部と日本の北海道に分布している。

> [鶴居・伊藤タンチョウサンクチュアリ](#)

## グリーンコンサートを開催

中国



コニカミノルタビジネスソリューションズ（香港）社は、エネルギー危機への理解と環境に配慮したライフスタイルを呼びかける、環境・スポーツ・音楽・チャリティを一体化したイベント「コニカミノルタ グリーンコンサート」を 2010 年から毎年開催しています。また、コンサートに必要な電力をまかなうため、固定自転車のペダルを漕ぐことで発電する競技大会も開催しています。この競技大会で集められた資金はチャリティ団体に寄付されます。

## 森林保護活動に参加、協力

日本



コニカミノルタでは、さまざまな森林保護活動に参加、協力しています。「高尾の森づくりの会」は、東京都西部に位置する裏高尾の国有林において、生来の植生を考慮しつつ、間伐、植樹、下草刈りなどの作業を通して、針葉樹と広葉樹が混交した豊かな森の復元を目指しています。この会に法人会員として参加し、従業員もメンバーの一員として、毎月森づくりに汗を流しています。

また、コニカミノルタのデジタル印刷システムを用いて、同会の季刊の会報を制作し、提供しています。

> [高尾の森づくりの会](#)

## 地域の美化推進活動

コニカミノルタグループでは、各地の事業所周辺において、清掃や美化活動を行っています。



大阪狭山サイト



東京サイト



コニカミノルタビジネステクノロジー  
ズ(無錫)社

# 環境データ

コニカミノルタでは、事業活動全体のエネルギーや資源の投入量と、温室効果ガスの排出量や排出物量などを、製品のライフステージごとに測定しています。この結果を分析することによって、環境負荷低減に向けた具体的な取り組みに活用しています。

## 環境負荷の全体像

(2015年度)



※ 算定対象範囲: 全世界の連結対象の全販売会社

★ : 第三者保証対象指標

## 環境データ算定基準

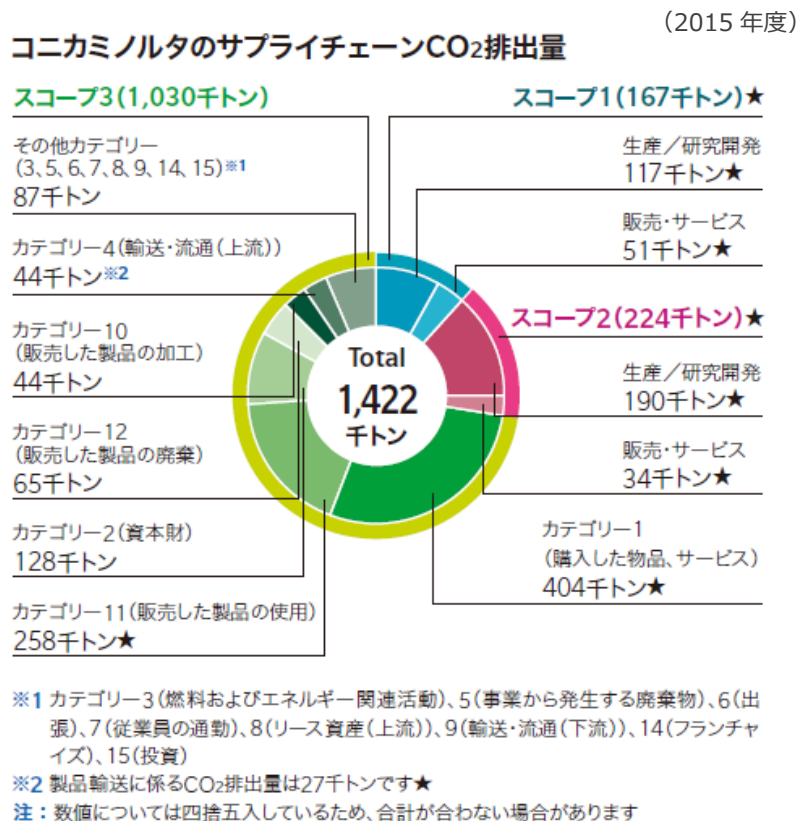
中期環境計画で目標値を設定している項目および取水量についての算定基準は P86,87 を参照ください。

## サプライチェーン全体のCO<sub>2</sub>排出量

コニカミノルタは、サプライチェーンの上流から下流までにわたる事業活動にともなうCO<sub>2</sub>排出量について、原則として国際標準であるGHGプロトコル<sup>※</sup>の基準に準拠して算定を行っています。2015年度の実績は約142万トンで、2014年度から約4%増加しました。今年度よりカテゴリ9（輸送・流通（下流））およびカテゴリ10（販売した製品の加工）を算定対象に加えています。この影響を除くと、全体では昨年度比で僅かに減少しました。コニカミノルタの事業活動による排出、すなわち、燃料使用にともなう直接排出（スコープ1）と、外部から購入する電力や熱の使用にともなう間接排出（スコープ2）の合計は約39万トン、全体の約28%でした。これに対して、コニカミノルタの活動にともなう間接的な排出（スコープ3）は、約103万トン、全体の約72%を占めることがわかりました。

サプライチェーン全体の28.4%を占める「購入した物品、サービス」では、お取引先との協働によるCO<sub>2</sub>削減量の目標を設定し、ともに改善に取り組んでいます。お取引先の生産工程に対する改善提案と技術支援の活動を行い、材料やエネルギーの削減に取り組んでいます。製品開発では、資源の投入量を抑える製品の小型・軽量化の設計や再生樹脂の開発に取り組んでいます。また、18.2%を占める「販売した製品の使用」では、製品本体の消費電力の削減に加え、お客様の節電を促進する機能の開発に取り組んでいます。今後も、これら算定結果を踏まえて、関連するステークホルダーと情報を共有しながら、サプライチェーン全体でのCO<sub>2</sub>排出量管理と削減活動を進めていきます。

※ GHGプロトコル：温室効果ガス（Greenhouse Gas：GHG）排出量の算定と報告のガイドライン



★：第三者保証対象指標

## 2015年度の算定結果

## 各カテゴリーの算定結果

スコープ 1, 2, 3 (カテゴリー)	概要	CO <sub>2</sub> 排出量 (トン)	全体に占める比率	
スコープ 1	生産／研究開発	116,525	8.2%	11.8%
	販売・サービス	50,835	3.6%	
スコープ 2	生産／研究開発	190,370	13.4%	15.8%
	販売・サービス	33,928	2.4%	
スコープ 3	1 購入した物品、サービス	403,562	28.4%	72.5%
	2 資本財	128,356	9.0%	
	3 燃料およびエネルギー関連活動	7,381	0.5%	
	4 輸送・流通（上流）	43,916	3.1%	
	5 事業から発生する廃棄物	19,786	1.4%	
	6 出張	27,312	1.9%	
	7 従業員の通勤	13,931	1.0%	
	8 リース資産（上流）	423	0.0%	
	9 輸送・流通（下流）	14,086	1.0%	
	10 販売した製品の加工	44,216	3.1%	
	11 販売した製品の使用	258,259	18.2%	
	12 販売した製品の廃棄	64,507	4.5%	
	13 リース資産（下流）	-	-	
	14 フランチャイズ	1,095	0.1%	
	15 投資	3,346	0.2%	
合計		1,421,835	100.0%	100.0%

(注) 数値については四捨五入しているため、合計が合わない場合があります

スコープ 3 における CO<sub>2</sub> 排出量 算定方法

カテゴリー	概要	算定方法
1	購入した物品、サービス	情報機器および消耗品については販売数量や生産数量、その他製品については資源投入量に、それぞれの製品を構成する素材の排出原単位等に乗じて算出しています。
2	資本財	1 年間に購入した資本財に関する設備投資の金額に、投資金額当たりの排出原単位を乗じて算出しています。
3	燃料及びエネルギー関連活動	購入燃料および購入した電力が発電される際に用いられる燃料の採取、生産、輸送にともなう排出を対象として算定しています。 <燃料>年間購入量に、燃料別の排出原単位を乗じて算定しています。 <電力>電源別の電力購入量に燃料調達時の排出原単位を乗じて算出。各国の



		電源構成比は「主要国の電源別発電電力量の構成比」(電気事業連合会)から特定しています。
4	輸送・流通(上流)	このカテゴリでは A)部品/素材の調達に係る排出量、B)製品を出荷する際の輸送に係る排出量を算定しています。 A)サプライヤーから自社工場までの調達物流に係る排出が対象です。貨物重量に輸送距離を乗じ、その値に輸送手段ごとに用意された CO <sub>2</sub> 排出係数を掛け合わせることで算出しています。 B)国際間、日本国内および中国国内の出荷物流に係る排出を対象として算定。貨物重量に輸送距離を乗じ、その値に輸送手段別の排出原単位を乗じて算定しています。
5	事業から発生する廃棄物	生産、研究開発および販売拠点からの排出物(有価売却は除く)を対象として算定。排出物を種類別に分類し、その排出物の外部委託量に、廃棄処理方法別の排出原単位を乗じて算定しています。
6	出張	年間の出張経費に、移動手段別の支払金額当たり排出原単位を乗じて算定。排出原単位は、最も数値が高い“旅客航空機(国内線)”を採用。日本以外は従業員構成比率に基づいて推計しています。
7	従業員の通勤	年間の通勤費に、交通費支給額当たり排出原単位を乗じて算定。排出原単位は、最も数値が高い“自動車(バス・営業車乗合)”を採用。日本以外は従業員構成比率に基づいて推計しています。
8	リース資産(上流)	ほとんどのリース資産はスコープ 1、2 排出量として算定しており、一部リース資産(データセンター)が対象。リース使用したサーバーの年間電力使用量の実績値と、電力の CO <sub>2</sub> 排出係数を乗じて算定しています。
9	輸送・流通(下流)	コニカミノルタ製品のディーラー販売に関わる排出量を対象として算定。主要販社の直販売上高および物流による排出量実績から、売上高あたりの CO <sub>2</sub> 排出原単位を特定し、これにディーラーによる売上高を乗じて推計しています。
10	販売した製品の加工	コニカミノルタの製品群には半製品が含まれます。主要部材の販売先のスコープ 1 およびスコープ 2 排出量実績と販売数量から、販売数量あたりの CO <sub>2</sub> 排出原単位を特定し、これに全体の販売数量を乗じることで算定しています。
11	販売した製品の使用	製品の市場稼働台数(年度ごとの販売台数と製品寿命から推計)に、想定される機種ごとの年間電力消費量 <sup>*</sup> と CO <sub>2</sub> 排出係数(GHG プロトコルが公表する 2005 年度全世界平均値)を乗じて算出しています。 コニカミノルタが採用している算定方法は、GHG プロトコルと若干異なっていますが、実際の事業運営により近い数値を算定することができ、CO <sub>2</sub> 排出削減活動をスムーズに実践することができます。
12	販売した製品の廃棄	製品本体および容器包装の廃棄に係る排出を対象として、販売した製品を構成する部材の重量と処理方法別の排出原単位を乗じて算定しています。昨年度に販売した製品が将来的に廃棄される量を、当該年度の排出とみなして計上しています。
13	リース資産(下流)	コニカミノルタの製品はすべてリース会社を通してリースされています。コニカミノルタとお客様が直接リース契約を結ぶことはありません。また、大規模な建屋や設備のリースはありませんでした。このため、このカテゴリに該当する排出はなしと判断しました。
14	フランチャイズ	キンコーズ九州・広島・四国の施設からの排出が該当します。キンコーズ・ジャパン(株)本社のエネルギー使用量をもとに、従業員構成比率に基づいて推計しています。

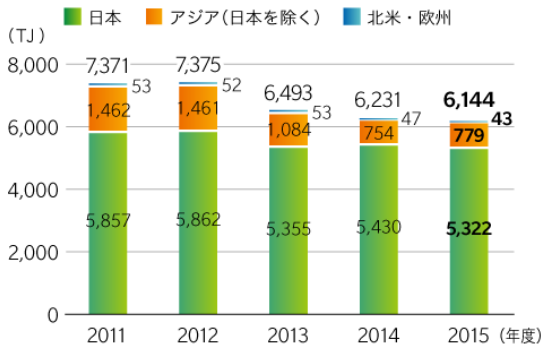
15	投資	コニカミノルタが特定投資株式を保有する主要投資先企業の排出分を対象として算定しています。投資先企業の CO <sub>2</sub> 排出量に、投資先企業におけるコニカミノルタの株式保有率%（コニカミノルタ保有株式数／発行済み株式数）を乗じて算定しています。
----	----	---

※情報機器は国際エネルギースタープログラムに規定された TEC 値、ヘルスケア製品は製品仕様などに基づいています。

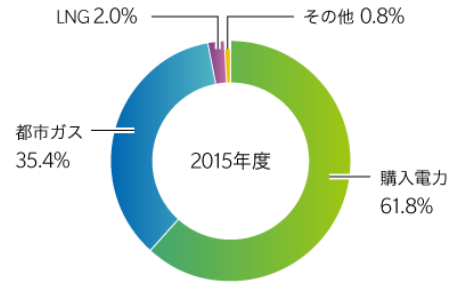
# エネルギー・CO<sub>2</sub>

## エネルギー

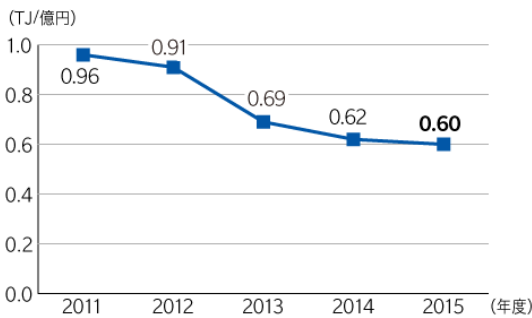
エネルギー投入量\*



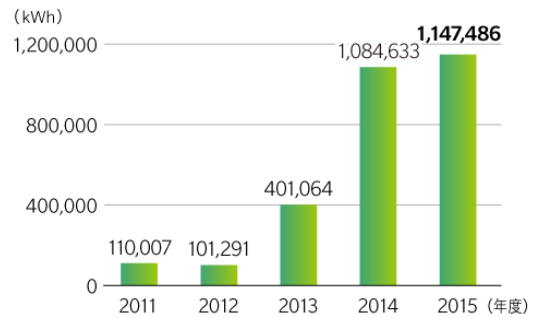
使用エネルギーの内訳



エネルギー使用量 (原単位推移)

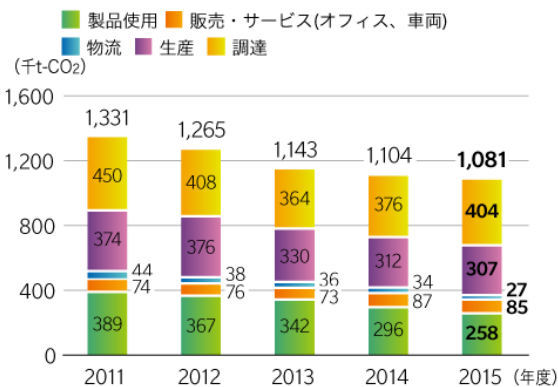


再生可能エネルギー発電量



## CO<sub>2</sub>

製品ライフサイクルCO<sub>2</sub>排出量\*

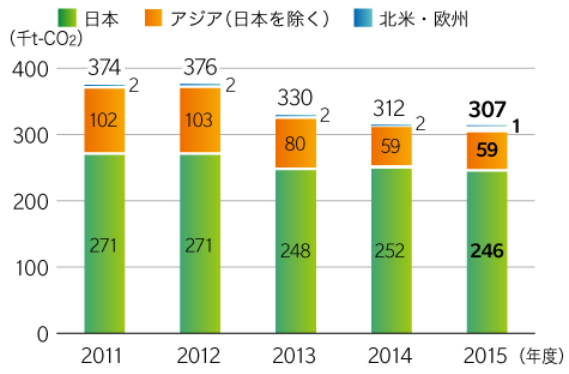


注1：データ精度向上のため、2015年度に情報機器製品の調達段階のCO<sub>2</sub>排出量の算定式を見直しました。

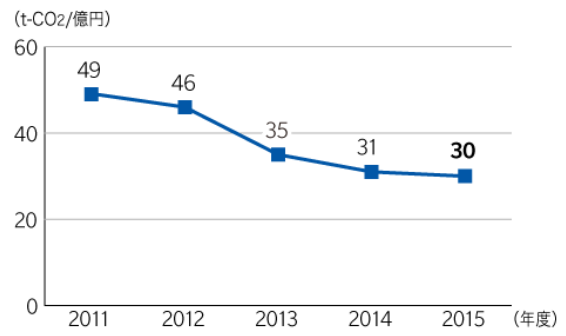
この結果、調達段階のCO<sub>2</sub>排出量が19.8千トン増加しました

注2：数値については四捨五入しているため、合計が合わない場合があります

生産段階でのCO2排出量★



生産段階でのCO2排出量 (原単位推移)

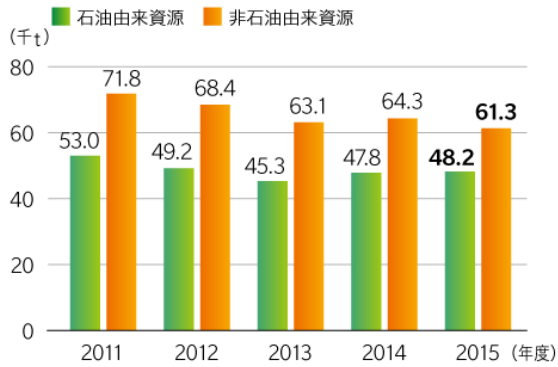


★ : 第三者保証対象指標

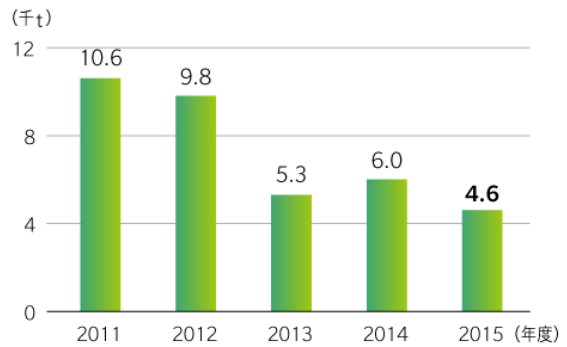
# 資源

## 資源投入

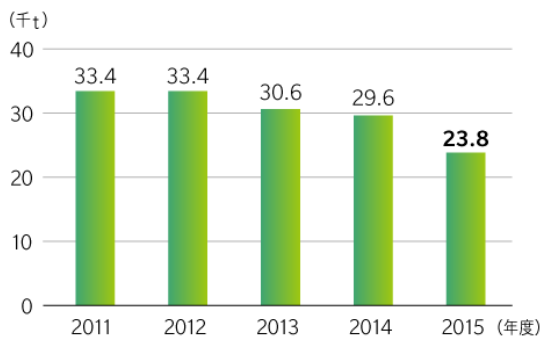
石油由来・非石油由来資源投入量



内部リサイクル量

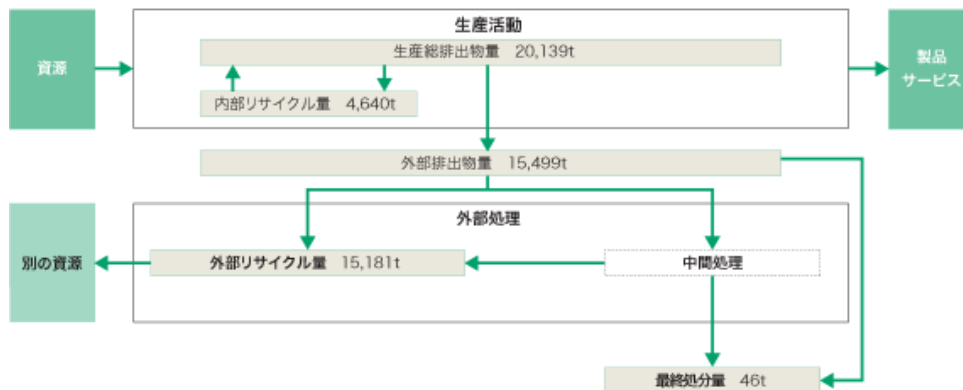


包装材料使用量

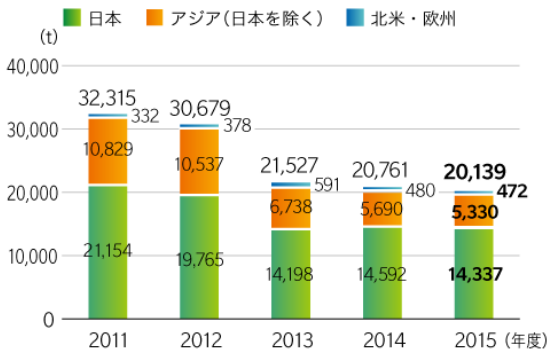


## 廃棄物

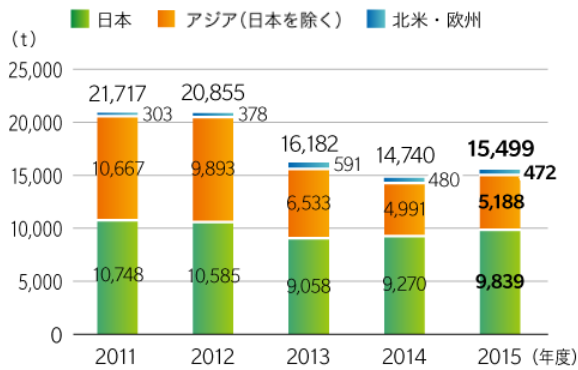
排出物フロー 2015年度実績



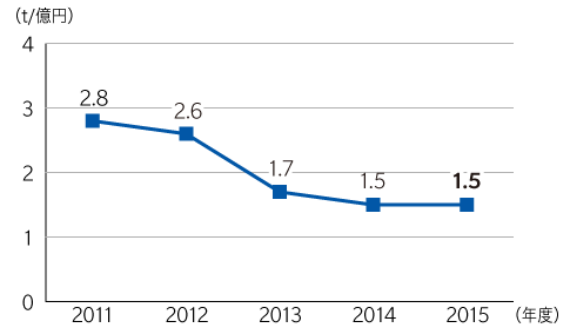
### 生産排出物量



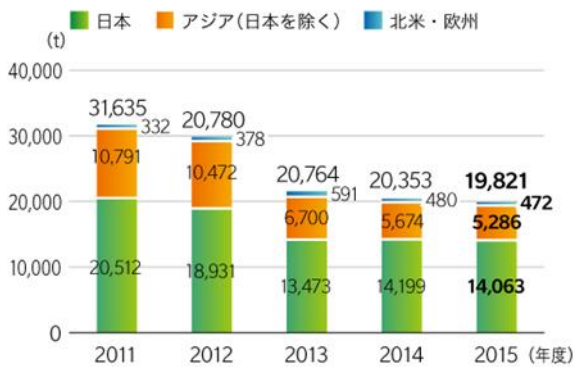
### 外部排出物量\*



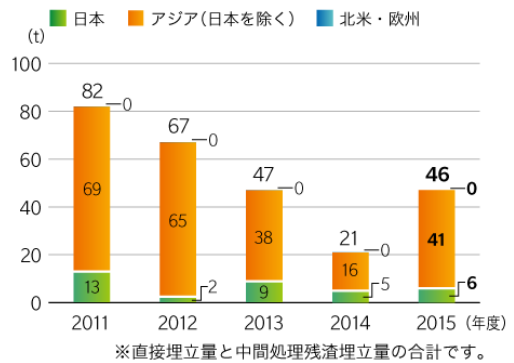
### 外部排出物量（原単位推移）



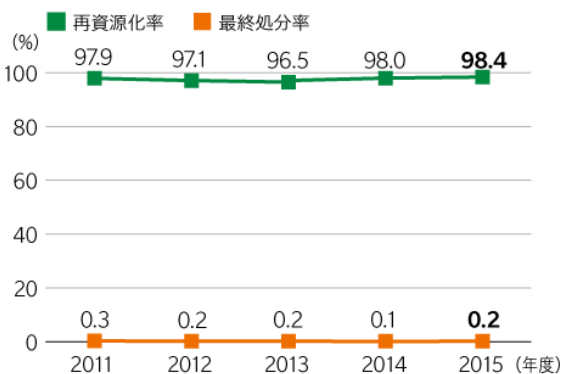
### 再資源化量（内部リサイクル量+外部リサイクル量）



### 最終処分量（埋立量）\*



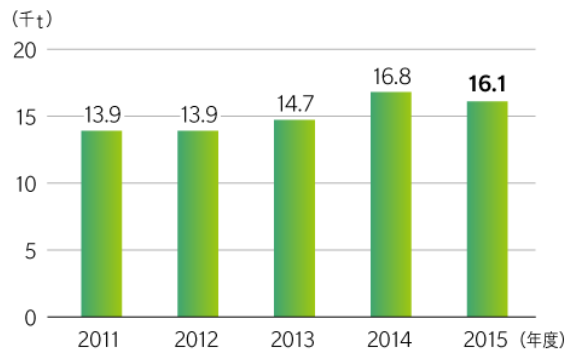
### 再資源化率・最終処分率



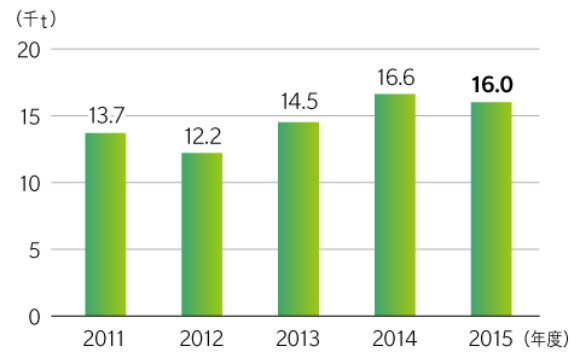
数値については四捨五入しているため、合計が合わない場合があります

## 製品回収・リサイクル

製品回収量



製品回収再資源化量

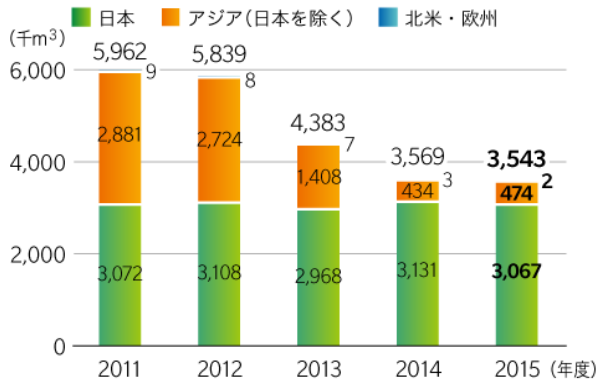


★：第三者保証対象指標

# 水

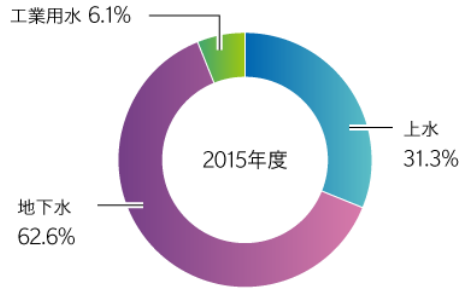
## 取水

水使用量\*

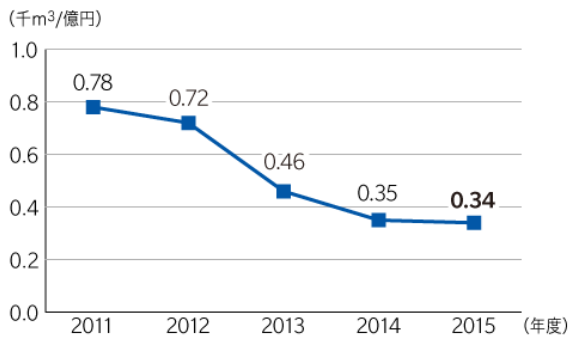


※2014年度以降の水使用量には、土壌・地下水対策用の揚水量を含みます

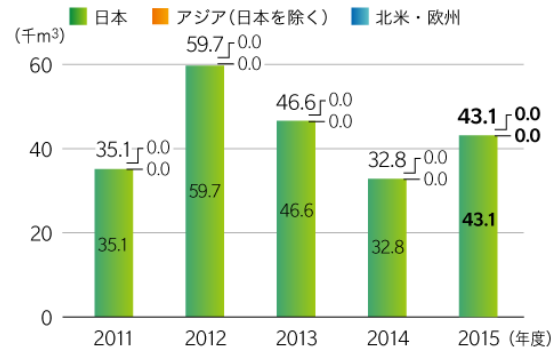
水使用量の内訳



水使用量 (原単位推移)



循環水使用量

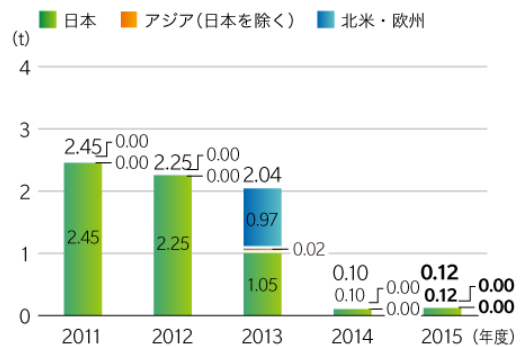


## 排水

排出量

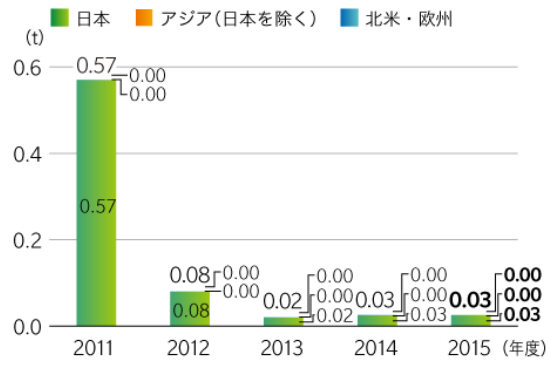


COD 負荷量 (公共水域)

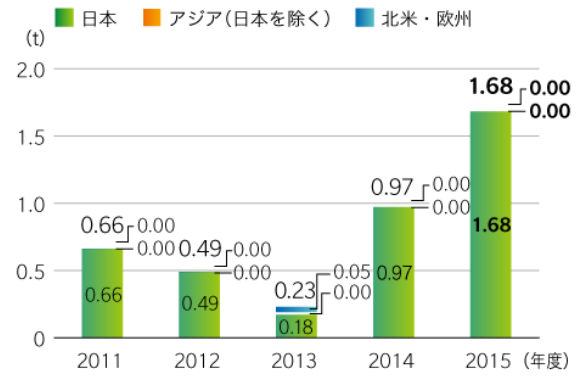




リン排出量（公共水域）



窒素排出量（公共水域）

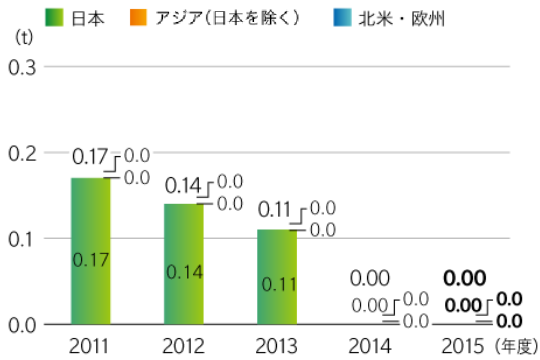


★：第三者保証対象指標

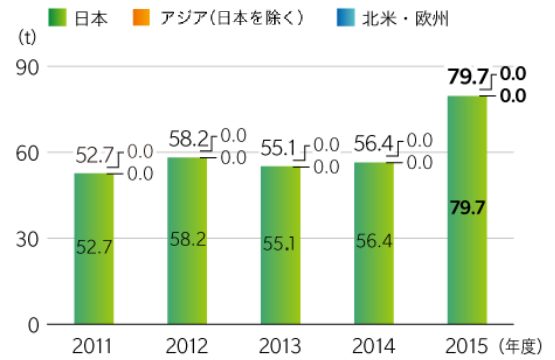
# 大気排出・化学物質

## 大気排出

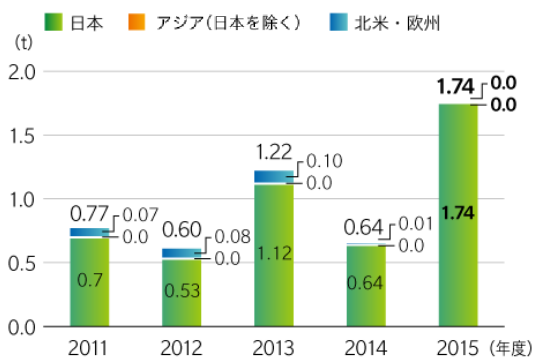
SOx 排出量



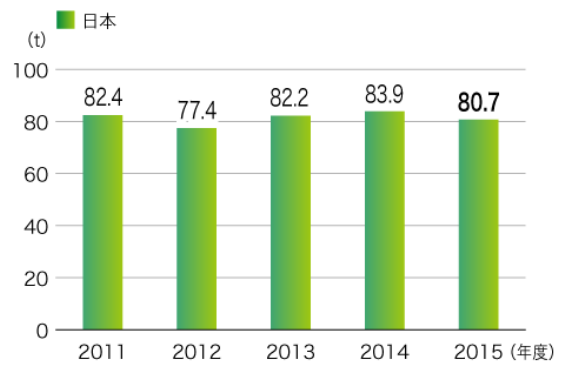
NOx 排出量



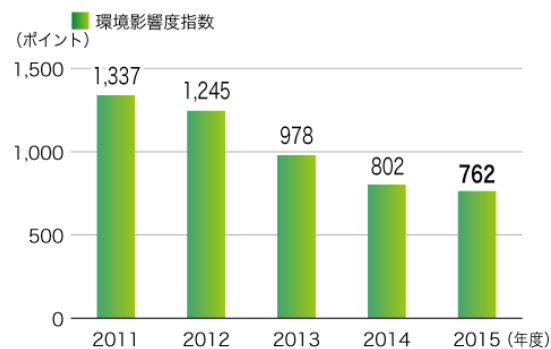
ばいじん排出量



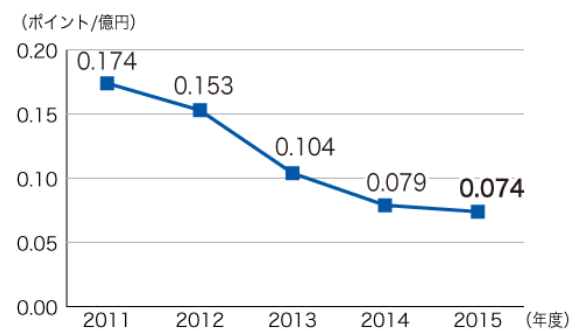
PRTR 対象物質の大気排出量



VOC大気排出量 (環境影響度指数)



VOC大気排出量 (環境影響度指数 原単位推移)



PRTR 対象物質

2015 年度 PRTR 対象物質

(t)

PRTR 法 政令番号	化学物質名	取扱量	排出量			消費量 製品	場内処理量 (焼却・分 解)	外部移動量		リサイ クル
			大気	公共水域	土壌			廃棄物	下水道	
4	アクリル酸及びその水溶性塩	3.0	0.0	0.0	0.0	3.0	0.0	0.0	0.0	0.0
7	アクリル酸ノルマルブチル	2,025.5	1.6	0.0	0.0	2,019.8	0.0	4.2	0.0	0.0
13	アセトニトリル	20.4	2.9	0.0	0.0	3.0	4.9	9.6	0.0	0.0
31	アンチモン及びその化合物 (Sb に換算)	1.1	0.0	0.0	0.0	1.1	0.0	0.0	0.0	0.0
71	塩化第二鉄	75.8	0.0	0.0	0.0	0.0	75.8	0.0	0.0	0.0
81	キノリン	4.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.5	0.0	0.0
82	銀及びその水溶性化合物 (Ag に換算)	47.2	0.0	0.0	0.0	47.1	0.0	0.0	0.1	0.0
151	1,3-ジオキソラン	13.6	4.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	9.3
181	ジクロロベンゼン	3.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.2	0.0	0.0
186	ジクロロメタン(別名: 塩化メチレン)	748.8	56.9	0.0	0.0	22.3	0.0	242.9	0.0	424.1
232	N,N-ジメチルホルムアミド(DMF)	43.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	43.9	0.0	0.0
240	スチレン	5,603.0	6.0	0.0	0.0	5,584.2	0.0	13.5	0.0	0.0
275	ドデシル硫酸ナトリウム	2.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.2	0.0
300	トルエン	192.2	8.0	0.0	0.0	3.4	0.2	180.7	0.0	0.0
353	フタル酸ジエチル	1.1	0.0	0.0	0.0	1.1	0.0	0.0	0.0	0.0
392	ノルマル-ヘキサン (n-ヘキサン)	92.7	0.6	0.0	0.0	17.6	1.6	72.9	0.0	0.0
395	ペルオキシ二硫酸の水溶性塩	176.1	0.0	0.0	0.0	17.5	157.4	1.2	0.0	0.0
412	マンガン及びその化合物 (Mn に換算)	252.8	0.0	0.0	0.0	252.8	0.0	0.0	0.0	0.0
415	メタクリル酸	377.6	0.6	0.0	0.0	375.8	0.0	1.2	0.0	0.0
420	メタクリル酸メチル	141.2	0.0	0.0	0.0	141.2	0.0	0.3	0.0	0.0
455	モルホリン	28.8	0.0	0.0	0.0	2.9	0.0	25.8	0.0	0.0
461	りん酸トリフェニル	5.6	0.0	0.0	0.0	4.6	0.0	5.6	0.0	0.0

※ PRTR (環境汚染物質排出・移動登録) 制度の定義に従い、再資源化していても有価売却でない場合は廃棄物として集計しました

※ 集計範囲: 日本国内のコニカミノルタグループ生産拠点

## 拠点別環境データ

## コニカミノルタ（株）国内拠点（2015年度）

拠点名/ 所在地	主要業務内容	CO <sub>2</sub> 排出量 (t-CO <sub>2</sub> )	外部排 出物量 (t)	最終 処分量 (t)	水総使用 量 (m <sup>3</sup> )				排水量 (m <sup>3</sup> )	VOC 大気 排出 量 (t)	PRTR 対象物 質大気 排出量 (t)
						地下水 (m <sup>3</sup> )	工業 用水 (m <sup>3</sup> )	上水道 (m <sup>3</sup> )			
東京サイト 日野 (東京都日 野市)	写真感光材料の 製造、印刷機器 の開発・製造	23,568	815	1.3	493,687	493,687	-	-	467,070	*1	0.0
東京サイト 八王子 (東京都八 王子市)	情報機器、光学 デバイス、ヘル スケア製品など の開発・製造	16,834	899	0.0	93,857	78,613	-	15,244	109,378	*1	0.0
甲府サイト (山梨県甲 府市)	光電変換素子の 製造	7,124	103	0.0	192,952	110,717	-	82,235	144,800	*1	0.0
瑞穂サイト (愛知県豊 川市)	情報機器関連の 開発、生産	4,615	517	0.0	20,521	-	-	20,521	19,253	*1	0.0
三河サイト (愛知県豊 川市)	情報機器関連の 開発	765	107	0.0	9,100	-	-	9,100	8,139	*1	0.0
豊川サイト (愛知県豊 川市)	情報機器関連の 生産管理、生産	339	23	0.0	4,567	-	-	4,567	4,062	*1	0.0
大阪狭山サ イト (大阪府大 阪狭山市)	光学デバイスの 開発・製造	6,086	118	0.0	66,621	29,902	-	36,719	50,568	*1	0.0
堺サイト (大阪府 堺市)	産業用計測機器 等の開発、製 造、販売	1,314	52	0.0	33,600	23,120	-	10,480	33,600	*1	0.0
伊丹サイト (兵庫県伊 丹市)	光学デバイスの 開発・製造、情 報機器のソフト ウェア開発	1,148	103	0.0	29,305	703	-	28,602	13,083	*1	0.0
高槻サイト (大阪府高 槻市)	研究開発、知的 財産権の管理、 運用、工業デザ イン	1,242	30	0.0	11,477	-	-	11,477	8,720	*1	0.0
神戸・西 神・神戸第 2サイト (兵庫県神 戸市)	電子材料（TAC フィルム）の 製造	150,355	2,679	2.7	765,699	318,092	-	447,607	446,477	60.4	52.1

関係会社 国内生産拠点（2015年度）

拠点名(社名) / 所在地	主要製品	CO <sub>2</sub> 排出量 (t-CO <sub>2</sub> )	外部排出物量 (t)	最終処分量 (t)	水総使用量 (m <sup>3</sup> )				排水量 (m <sup>3</sup> )	VOC 大気排出量 (t)	PRTR 対象物質大気排出量 (t)
						地下水 (m <sup>3</sup> )	工業用水 (m <sup>3</sup> )	上水道 (m <sup>3</sup> )			
(株) コニカミノルタサプライズ (山梨県甲府市)	複合機・プリンター用消耗品	13,186	386	1.1	342,787	325,803	-	16,984	342,787	45.0	22.0
(株) コニカミノルタサプライズ辰野サイト (長野県上伊那郡辰野町)	複合機・プリンター用消耗品	6,648	659	0.2	329,223	327,946	-	1,277	329,223		
コニカミノルタサプライズ関西 (株) 三木サイト (兵庫県三木市)	複合機・プリンター用消耗品	268	80	0.0	2,201	-	-	2,201	2,122	*1	0.0
豊橋精密工業 (株) 本社サイト* (愛知県豊橋市)	複合機・プリンター用消耗品	1,328	231	0.2	121,561	121,034	-	527	120,739	*1	0.0
豊橋精密工業 (株) 小田淵サイト* (愛知県豊川市)	複合機・プリンター用消耗品・機構部品	293	38	0.0	1,763	-	-	1,763	935	*1	0.0
コニカミノルタ電子 (株) * (山梨県都留市)	複合機・プリンター用電子部品・機構部品	806	78	0.0	5,746	-	-	5,746	5,746	*1	0.0
コニカミノルタオプトプロダクト (株) 甲府サイト (山梨県笛吹市)	光学デバイス、インクジェットヘッド	5,829	407	0.0	388,650	388,650	-	-	388,100	*1	0.0
コニカミノルタテクノプロダクト (株) 狭山サイト (埼玉県狭山市)	ヘルスケア製品、印刷機器	1,926	70	0.0	11,345	-	-	11,345	11,345	*1	0.0
コニカミノルタケミカル (株) 静岡サイト (静岡県袋井市)	化学品	2,442	2,443	0.0	142,137	-	140,905	1,232	136,825	25.4	6.6

※コニカミノルタ電子株式会社と豊橋精密工業株式会社は合併し、「コニカミノルタメカトロニクス株式会社」に改称しました（2016年4月1日）。

関係会社 海外生産拠点（2015年度）

拠点名（社名）／所在地	主要製品	CO <sub>2</sub> 排出量（t-CO <sub>2</sub> ）	外部排出物量（t）	最終処分量（t）	水総使用量（m <sup>3</sup> ）				排水量（m <sup>3</sup> ）	VOC大気排出量（t）
						地下水（m <sup>3</sup> ）	工業用水（m <sup>3</sup> ）	上水道（m <sup>3</sup> ）		
Konica Minolta Business Technologies (Wuxi) Co., Ltd. (中国 江蘇省無錫市)	複合機、プリンターおよび消耗品	9,422	1,208	1.9	73,513	-	73,513	-	62,486	*1
Konica Minolta Business Technologies (Dongguan) Co., Ltd. (中国 広東省東莞市)	複合機、プリンターおよび消耗品	17,064	2,822	0.0	195,566	-	-	195,566	195,566	15.2
Konica Minolta Supplies Manufacturing U.S.A., Inc. (米国 ニューヨーク州)	複合機・プリンター用消耗品	981	222	0.0	744	-	-	744	744	*1
Konica Minolta Supplies Manufacturing France S.A.S. (フランス ロレーヌ地域圏)	複合機・プリンター用消耗品	493	251	0.0	1,120	-	-	1,120	1,016	*1
Konica Minolta Business Technologies (Malaysia) Sdn. Bhd. (マレーシアマラッカ州)	複合機・プリンター用消耗品	5,846	676	34.7	71,480	-	-	71,480	71,480	0
Konica Minolta (Xiamen) Medical Products Co., Ltd. (中国 福建省廈門市)	ヘルスケア製品	203	241	0.0	293	-	293	-	150	0
Konica Minolta Opto (Dalian) Co., Ltd. (中国 遼寧省大連市)	光学デバイス	24,444	212	3.9	118,068	-	-	118,068	94,454	78.2
Konica Minolta Optical Products (Shanghai) Co., Ltd. (中国 上海市)	光学デバイス	2,327	29	0.1	15,142	-	-	15,142	13,628	*1

※ 海外拠点は、PRTR 制度の対象外です。

※ 国内拠点の PRTR 対象物質大気排出量算出において、取扱量が 1 トン以下の物質は集計対象外です。

\*1 算定基準で定める基準値以下

# 環境データ算定基準

## コニカミノルタグループ算定基準(CO<sub>2</sub> 排出量)

### 対象範囲と算定基準

ライフステージ		算定方法
1.調達	1).対象範囲	コニカミノルタ（株）が製造・販売する、情報機器および消耗品、機能材料、産業用光学システム、ヘルスケア製品
	2).算定基準	情報機器および消耗品については販売数量や生産数量、その他製品については資源投入量に、それぞれの製品を構成する素材の排出原単位等に乗じて算出しています。
2.生産/ 研究開発	1).対象範囲	全世界の生産・研究開発拠点
	2).算定基準	各拠点のエネルギー使用量に、以下の係数を乗じて算出しています。 燃料：地球温暖化対策推進法（温対法）に規定される係数 電気：＜日本＞電気事業連合会が公表する2005年度全電源平均値 ＜海外＞GHGプロトコルが公表する各国の2005年度CO <sub>2</sub> 排出係数
3.物流	1).対象範囲	情報機器、光学デバイス、ヘルスケア製品に関する、国際間物流、日本国内物流、中国生産物流（工場から港まで）
	2).算定基準	主に貨物重量に輸送距離を乗じ、その値に輸送手段別のCO <sub>2</sub> 排出係数を乗じて算出しています。 国際間物流、中国生産物流：GHGプロトコルが公表するCO <sub>2</sub> 排出係数 日本国内物流：ロジスティクス分野におけるCO <sub>2</sub> 排出量算定方法共同ガイドラインVer.3.0に規定される係数
4.販売・ サービス	1).対象範囲	全世界の連結対象の全販売会社
	2).算定基準	<オフィス> 拠点のエネルギー使用量 <sup>※1</sup> に、以下の係数を乗じて算出しています。 燃料：地球温暖化対策推進法（温対法）に規定される係数 電気：＜日本＞電気事業連合会が公表する2005年度全電源平均値 ＜海外＞GHGプロトコルが公表する各国の2005年度CO <sub>2</sub> 排出係数  <車両> 車両用燃料の使用量 <sup>※2</sup> に、以下の係数を乗じて算出しています。 燃料：地球温暖化対策推進法（温対法）に規定される係数
5.製品使用	1).対象範囲	情報機器、ヘルスケア製品 （光学デバイスについては、他社製品の一部として組み込まれるため除外していま
	2).算定基準	市場稼働台数（年度ごとの販売台数と製品寿命から推計）に、想定される機種ごとの年間電力消費量 <sup>※3</sup> とCO <sub>2</sub> 排出係数（GHGプロトコルが公表する2005年度全世界平均値）を乗じて算出しています。

※1 エネルギー使用量には一部推定値を含みます

※2 燃料使用量には一部推定値を含みます

※3 情報機器は国際エネルギースタープログラムに規定されたTEC値、ヘルスケア製品は製品仕様などに基づいています

注：四捨五入の関係で、グラフの数値の合計と内訳が一致しない場合があります

## コニカミノルタグループ算定基準(CO<sub>2</sub> 排出量以外)

### 対象範囲と算定基準

算定項目		算定方法
1.製品への石油由来資源投入量	1).対象範囲	コニカミノルタ（株）が製造・販売する、情報機器および消耗品、機能材料、産業用光学システム、ヘルスケア製品 <sup>※1</sup>
	2).算定基準	製品仕様等に基づいて、素材・部品重量に材質ごとの石油由来資源使用重量比率を乗じて算出しています。
2.包装材料の使用量	1).対象範囲	情報機器および消耗品、機能材料、産業用光学システム、ヘルスケア製品の包装に使用する素材・部品
	2).算定基準	販売実績に基づく製品の販売台数に、各製品 1 台当たりの包材重量(製品仕様等に基づく)を乗じて算出しています。
3.生産活動からの外部排出物量	1).対象範囲	全世界の生産・研究開発拠点
	2).算定基準	生産外部排出物重量 <sup>※2</sup> の実測値の合計
4.最終処分量	1).対象範囲	全世界の生産・研究開発拠点
	2).算定基準	最終処分量重量 <sup>※3</sup> （生産外部排出物量×最終処分率 <sup>※4</sup> ）の合計
5.VOC の大気排出量	1).対象範囲	全世界の生産拠点のうち、環境影響度指数 <sup>※5</sup> 1 ポイント/物質以上の物質を対象として、計算された個々の物質の環境影響度指数の総和が 10 ポイント以上となる拠点
	2).算定基準	VOC 大気排出の環境影響度指数の総和 <sup>※6</sup>
6.取水量	1).対象範囲	全世界の生産・研究開発拠点
	2).算定基準	取水量(上水道、地下水、工業用水)の合計

※1 中期環境計画と環境負荷の全体像の数値では、一部対象範囲が異なります

※2 生産・研究開発拠点で生じる、コニカミノルタに排出者責任のあるすべての排出物（廃棄物等）のなかで、コニカミノルタの拠点外に排出される量。

ただし、生産との関連のない排出物等は一部除外しています

※3 再資源化後の残渣を除きます

※4 最終処分率は個別に処理業者にヒアリングした値に基づいています

※5 環境影響度指数：コニカミノルタ独自の指数。

環境影響度指数(ポイント)＝VOC 大気排出量 (t) ×有害性係数×立地係数

有害性係数：直接的または間接的な、人への健康影響および環境影響の重篤度により、1 倍、10 倍、100 倍で設定（神奈川県安全影響度評価における係数の考え方を参考に、コニカミノルタが独自に設定）立地係数：工業団地外 5、工業団地内 1 で設定

※6 環境負荷の全体像では、有害性係数や立地係数を加味しないそのままの大気排出量を記載しています

※ 中期環境計画で削減目標がある石油由来資源の使用量は、①製品への石油由来資源投入量、②生産活動からの外部排出物量のうち石油由来資源廃棄物量、③販売・サービス時の車の燃料使用量を合計して算出しています

※ なお、四捨五入の関係で、グラフの数値の合計と内訳が一致しない場合があります



## 土壌・地下水

### 土壌・地下水（汚染調査・対策実績）

#### 土壌、地下水汚染への取り組み

定期観測による汚染状況管理と、浄化促進および汚染拡大防止に努めています。

土壌や地下水の汚染が発見された拠点では、汚染物質が周辺に影響を及ぼすことがないように、定期観測による確実な管理を行っています。

汚染に対する浄化や汚染拡大防止にあたっては、専門チームを編成し、その管理のもと、対策策定のための詳細調査の実施や汚染状況に適した浄化技術の検討を行い、取り組みを進めています。

なお、浄化の取組み結果や観測結果の推移は、定期的に行行政、近隣の皆様に報告し、確認いただいています。

#### 土壌、地下水汚染が確認されている各拠点の状況

事業所	浄化、監視対象物質	2015年度の進捗
東京サイト日野 (東京都日野市)	フッ素、ホウ素、水銀、 ベンゼン、鉛	敷地境界に設けた観測井による地下水定期観測で、使用履歴のある特定有害物質は環境基準値以下であり、周辺への影響はないことを確認しています。 解体工事に向けた事前調査にて、鉛の土壌含有量基準値超過が確認されました。汚染拡散防止措置が完了し、周辺への影響はありません。 ベンゼンの基準値超過区画については、掘削浄化できなかつた部分について、ガス吸引による浄化を進めています。 地下水への影響はありません。
東京サイト八王子 (東京都八王子市)	六価クロム	敷地内に設けた揚水井による揚水により、浄化・汚染拡散防止を引き続き進めています。また、地下水定期観測を継続し、敷地外流出はないことを確認しています。
甲府サイト (山梨県中央市)	フッ素	敷地境界での定期観測を継続しており、地下水の基準値超過はないことを確認しています。
三河サイト西地区 (愛知県豊川市)	TCE <sup>※1</sup> 、フッ素	2013年度に揚水対策を終了しましたが、それ以降も定期的に地下水を監視し、基準値以下が継続しています。 フッ素による土壌汚染については、地下水定期観測で敷地外流出はないことを確認しています。
伊丹サイト (兵庫県伊丹市)	鉛、ヒ素、カドミウム、 フッ素、ホウ素	敷地内の一部箇所で確認されている地下水のホウ素基準値超過に対しては、揚水による浄化・汚染拡散防止を継続し、敷地外流出はないことを確認しています。 また、鉛、ヒ素、カドミウム、フッ素についても地下水観測で敷地外流出はないことを確認しています。

堺サイト (大阪府堺市)	TCE、PCE <sup>※2</sup> 、c-DCE <sup>※3</sup> 鉛、ヒ素、カドミウム	TCE、PCE、c-DCE については、揚水による浄化・汚染拡散防止を継続し、敷地外流出防止を行っています。 鉛、ヒ素、カドミウムについても、地下水定期観測では敷地境界の観測井すべてで環境基準値以下であり、周辺への影響はないことを確認しています。
大阪狭山サイト (大阪府大阪狭山市)	TCE、PCE、c-DCE	2012 年度に実施した排水処理施設周辺の浄化工事後も、揚水による浄化・汚染拡散防止を継続しています。
南海光学工業(株) 跡地 (和歌山県海南市)	TCE、PCE、c-DCE	2015 年度より敷地内の浄化工事を実施しています。引き続き敷地境界での地下水観測を継続しています。
豊橋精密工業(株) 本 社サイト(愛知県豊橋 市)(現コニカミノル タメカトロニクス (株) 植田事業所)	TCE、c-DCE、六価ク ロム	対象物質の敷地外への流出がないことを定期観測により確認しています。敷地内での揚水による地下水浄化を継続しており、回収した地下水は処理前でも基準値内に納まっています。
コニカミノルタオプ トプロダクト(株) (山梨県笛吹市)	TCE、PCE、c-DCE	揚水、透過反応壁、バイオバリア法による地下水の浄化と定期観測を行っており、対象物質の敷地外流出はないことを確認しています。
(株)コニカミノルタ サブライズ (山梨県甲府市)	TCE、PCE、c-DCE	2014 年度に実施したバイオ法浄化工事の後、下流側の観測井で地下水の定期観測を行い、効果確認を継続中です。

※1 TCE : トリクロロエチレン

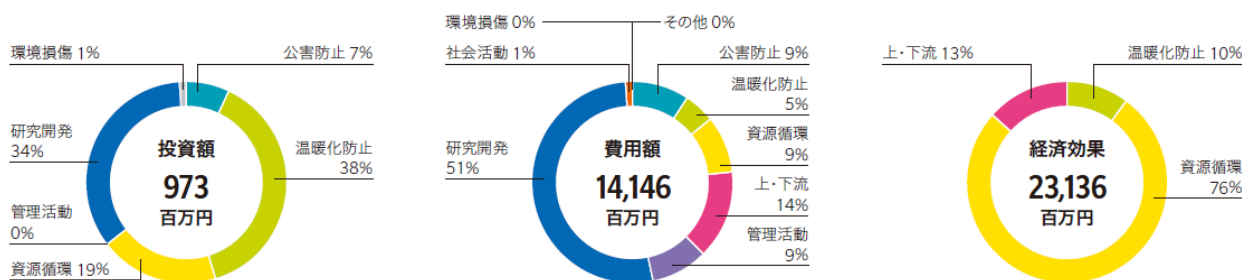
※2 PCE : テトラクロロエチレン

※3 c-DCE : シス 1,2 ジクロロエチレン (TCE、PCE の分解物)

## 2015 年度の環境会計

コニカミノルタは、事業活動における環境保全のためのコストとその活動により得られた効果を定量的に測定するため、グローバルな連結環境会計を実施しています。

2015 年度の費用額は前年度とほぼ同額の約 141 億円でした。主な費用は、情報機器および機能材料における環境に配慮した製品の開発費用です。投資額は約 10 億円でした。主な投資は機能材料における次世代製品に関わるものや定期的な設備更新でした。



注：割合については四捨五入しているため、合計が100%にならない場合があります

### 2015 年度決算

(百万円)

環境保全活動の分類	主な取り組み内容	2015 年度決算		
		投資額	費用額	経済効果
1.事業エリア内コスト		622	3,367	20,093
	1) 公害防止	73	1,328	0
	2) 温暖化防止	365	720	2,420
	3) 資源循環	185	1,319	17,672
2.上・下流コスト	製品回収・リサイクル	0	2,002	3,044
3.管理活動コスト	環境 ISO 維持・推進	3	1,295	0
4.研究開発コスト	省エネ製品・有害物質フリー製品の開発	334	7,266	0
5.社会活動コスト	自然環境保全活動	0	101	0
6.環境損傷コスト	土壌汚染の修復・保全	13	70	0
7.その他コスト		0	45	0
合計		973	14,146	23,136

## 2015 年度決算 環境保全効果

ライフステージ	効果項目	効果
生産	水使用量の削減(t) <sup>※1</sup>	25,014
	電力使用量の削減 (MWh) <sup>※1</sup>	123,050
	都市ガス使用量の削減 (千 m <sup>3</sup> ) <sup>※1</sup>	11,335
	重油使用量の削減 (k l) <sup>※1</sup>	98
	削減対象化学物質の削減(t) <sup>※1</sup>	12
	資源投入量の削減(t) <sup>※1</sup>	133,160
	廃棄物の外部リサイクル・リユース(t) <sup>※2</sup>	13,532
販売	容器包装の削減(t) <sup>※1</sup>	247
	使用済み製品からのリサイクル・リユース(t) <sup>※2</sup>	16,102
使用	CO <sub>2</sub> 排出量の削減(t) <sup>※3</sup>	6,607

※1 各活動を実施しなかったと仮定した場合の推定使用量から、実績使用量を差し引いて算定しています。

※2 活動によるリサイクル・リユース量を環境保全効果として算定しています。

※3 当年度の主要な新製品について、その製品の従来機の使用による想定 CO<sub>2</sub> 排出量から、新製品の使用による想定 CO<sub>2</sub> 排出量を差し引いて算定しています。

## 2015 年度決算 お客様使用時の効果

ライフステージ	効果項目	効果
使用	消費電力削減量 <sup>※4</sup> (MWh)	15,619
	消費電力削減額 <sup>※5</sup> (百万円)	225

※4 2015 年度に出荷した主要な新製品について、その製品の従来機の使用による想定消費電力量から、新製品の使用による想定消費電力量を差し引いて算定しています。

※5 上記消費電力削減量に、日本国内生産拠点の電力料金の平均単価を乗じて算定しています。

## 2015 年度決算の集計範囲

### コニカミノルタ (株)

#### 国内関係会社 計 16 社

- コニカミノルタブラネタリウム株式会社
- コニカミノルタ情報システム株式会社
- 株式会社コニカミノルタサプライズ
- コニカミノルタサプライズ関西株式会社
- 豊橋精密工業株式会社<sup>※</sup>
- コニカミノルタ電子株式会社<sup>※</sup>
- コニカミノルタビジネスソリューションズ株式会社<sup>※</sup>

- コニカミノルタケミカル株式会社
- コニカミノルタオプトプロダクト株式会社
- コニカミノルタオプトデバイス株式会社
- コニカミノルタテクノプロダクト株式会社
- コニカミノルタヘルスケア株式会社
- コニカミノルタテクノサーチ株式会社
- コニカミノルタエンジニアリング株式会社
- コニカミノルタビジネスアソシエイツ株式会社
- キンコース・ジャパン株式会社

#### 海外関係会社 計 22 社


- Konica Minolta Business Technologies (Dongguan) Co., Ltd.
- Konica Minolta Business Technologies (Wuxi) Co., Ltd.
- Konica Minolta Business Solutions (China) Co., Ltd.
- Konica Minolta Supplies Manufacturing U.S.A., Inc.
- Konica Minolta Business Solutions U.S.A., Inc.
- Konica Minolta Business Solutions Europe GmbH.
- Konica Minolta Business Solutions Deutschland GmbH
- Konica Minolta Business Solutions (UK) Ltd.
- Konica Minolta Supplies Manufacturing France S.A.S.
- Konica Minolta Business Solutions France S.A.S.
- Konica Minolta Business Solutions Australia Pty. Ltd.
- Konica Minolta Business Technologies (MALAYSIA) SDN. BHD.
- Konica Minolta Opto (Dalian) Co., Ltd.
- Konica Minolta Optical Products (Shanghai) Co., Ltd.
- Konica Minolta Opto (Shanghai) Co., Ltd.
- Konica Minolta Sensing Americas, Inc.
- Konica Minolta Sensing Europe B.V.
- Konica Minolta Sensing Singapore, Pte. Ltd.
- Instrument Systems GmbH
- Konica Minolta Medical Imaging U.S.A., Inc.
- Konica Minolta Medical & Graphic Imaging Europe B.V.
- Konica Minolta Medical & Graphic (SHANGHAI) Co., Ltd.

※コニカミノルタ電子株式会社と豊橋精密工業株式会社は合併し、「コニカミノルタメカトロニクス株式会社」に改称しました（2016年4月1日）。

※コニカミノルタビジネスソリューションズ株式会社とコニカミノルタヘルスケア株式会社は合併し、「コニカミノルタジャパン株式会社」に改称しました（2016年4月1日）。

## 第三者保証

本報告書に記載されている調達、生産/研究開発、製品輸送、販売・サービス、製品使用に起因するCO<sub>2</sub>排出量、エネルギー使用量、外部排出物量、VOC大気排出量および水使用量が、コニカミノルタが定める基準に従って把握、集計、開示されているかについて、KPMGあずさサステナビリティ株式会社による保証を受けました。保証対象指標には★マークを付しています。




**独立した第三者保証報告書**

2016年9月2日

コニカミノルタ株式会社  
代表執行役社長 山名 昌衛 殿

KPMGあずさサステナビリティ株式会社  
東京都千代田区大手町1丁目9番5号

代表取締役 

当社は、コニカミノルタ株式会社(以下、「会社」という。))からの委嘱に基づき、会社が作成した環境報告書2016(以下、「環境報告書」という。))に記載されている2015年4月1日から2016年3月31日までを対象とした★マークの付されている環境パフォーマンス指標(以下、「指標」という。))に対して限定的保証業務を実施した。

**会社の責任**  
環境省の環境報告ガイドライン2012年版、エネルギーの使用の合理化に関する法律、地球温暖化対策の推進に関する法律、「The Greenhouse Gas Protocol: A Corporate Accounting and Reporting Standard」(2004年 WRI/WBCSD)を参考にして会社が定めた指標の算定・報告基準(以下、「会社の定める基準」という。会社のウェブサイトに記載。))に従って指標を算定し、表示する責任は会社にある。

**当社の責任**  
当社の責任は、限定的保証業務を実施し、実施した手続に基づいて結論を表明することにある。当社は、国際監査・保証基準審議会の国際保証業務基準(ISA)3000「過去財務情報の監査又はレビュー以外の保証業務」、ISA3410「温室効果ガス情報に対する保証業務」及びサステナビリティ情報審査協会のサステナビリティ情報審査実施指針に準拠して限定的保証業務を実施した。

本保証業務は限定的保証業務であり、主として環境報告書上の開示情報の作成に責任を有するもの等に対する質問、分析的手続等の保証手続を通じて実施され、合理的保証業務における手続と比べて、その種類は異なり、実施の程度は狭く、合理的保証業務ほどには高い水準の保証を与えるものではない。当社の実施した保証手続には以下の手続が含まれる。

- 環境報告書の作成・開示方針についての質問及び会社の定める基準の検討
- 指標に関する算定方法並びに内部統制の整備状況に関する質問
- 集計データに対する分析的手続の実施
- 会社の定める基準に従って指標が把握、集計、開示されているかについて、試査により入手した証拠との照合並びに再計算の実施
- リスク分析に基づき選定した園内1工場における現地往査
- 指標の表示の妥当性に関する検討

**結論**  
上述の保証手続の結果、環境報告書に記載されている指標が、すべての重要な点において、会社の定める基準に従って算定され、表示されていないと認められる事項は発見されなかった。

**当社の独立性と品質管理**  
当社は、誠実性、客観性、職業的専門家としての能力と正当な注意、守秘義務及び職業的専門家としての行動に関する基本原則に基づく独立性及びその他の要件を含む、国際会計士倫理基準審議会の公表した「職業会計士の倫理規程」を遵守した。  
当社は、国際品質管理基準第1号に準拠して、倫理要件、職業的専門家としての基準及び適用される法令及び規則の要件の遵守に関する文書化した方針と手続を含む、包括的な品質管理システムを維持している。

以上

実施期間：2016年3月～6月  
コニカミノルタ(株)大阪狭山サイトでの往査



## 保証業務を実施して

KPMGあずさサステナビリティ株式会社 菅生 直美 氏

今回、マテリアリティ(重要課題)を再評価し、特定されたマテリアリティを中心にCSR活動体系を再整理されています。CSRレポートはマテリアリティ別に構成され、ほとんどのマテリアリティについて、「背景と課題認識」、「目指す姿」、「重点施策とKPI」が示されており、コニカミノルタグループがなぜこうした課題に取り組むのか、どのような方向に進もうとしているのかがわかりやすく提示されていると考えます。また、定量情報の開示も進んだと考えます。例えば、女性管理職への登用や女性新卒者の積極的採用といった女性の活用に関する数値目標の設定といった具体的な会社の行動計画が開示されることで、コニカミノルタグループのアプローチがわかりやすく読者に伝わるようになったと考えます。

今回新たに特定したマテリアリティであるソーシャルイノベーションについては、「社会課題解決型デジタルカンパニー」を目指すという大きな方向性が示されています。今後は、どのような社会課題の解決に向けてコニカミノルタグループの技術やリソースをどのように活用し、それを通じてどのように企業価値を向上させていくかを検討し、より具体的に説明していくことが重要です。

「持続可能な開発目標(SDGs)」の実現に対する企業の貢献が期待されている中で、コニカミノルタがいかに社会課題の解決に寄与していくかという点が重視されています。ソーシャルイノベーションへの取り組みも、その手段のひとつとして大きな役割を果たすのではないかと考えます。